

SEIJU

2012年
第42卷

夏
季

成·壽





横山善
三
癸



■ 特
集

開山忌

育英会報恩供養
第二十五回 育英会辞令交付式





平成二十四年二月十日、釈迦殿で開山忌と横
浜善光寺留学僧育英会の報恩供養、並びに第二
十五回辞令交付式が執り行われ、関係のご寺院、
檀信徒総代、ゆかりの方々が参集されました。
新しく育英生に採用されたのはアメリカ人出
家僧のフランス・幸雲氏（39）で、駒澤大学へ
の派遣となります。現在、熊本県に在住し、南
北朝期に活躍した大智禪師の研究に取り組んで
いる気鋭の僧です。

開山・椋庵白純大和尚の開山忌法要は、金沢
市の大乗寺ご住職、育英会名誉顧問の東隆眞老
師に導師をお勤めいただきました。

法要の中で、東老師は「開山老大和尚は日本
仏教界稀有の大先達なり」と椋庵白純大和尚の
遺徳を称え、また二世中興大圓武志大和尚につ
いて「善光寺海外留学僧育英会の創設者にして
初代理事長なり。我と駒沢大学、大学院の同窓
にして最上の親友なり」と追慕の言葉を捧げら



れました。

続いて横浜善光寺留学僧育英会の辞令交付式が行われ、育英会理事の安藤嘉則老師が選考経過を報告。日本で出家得度したフランズ氏は、大智禪師が開創した熊本の聖護寺で長く安居修行し、米国・アンカレッジで参禅指導した道心の人と紹介されました。

黒田博志住職の導師により育英会報恩供養が営まれた後、黒田住職からフランズ氏に辞令と記念品が授与され、参列の僧侶、檀信徒の皆さまからの温かい拍手に包まれました。

式典の後、東老師は「育英会の原点は、大圓武志大和尚が、仏教を勉強する国内外の若い人の力になればと、檀信徒の方々から一日一食を捧げていただいたことにあります。しっかりと仏教を身につけ、人々の幸せに尽くしてもらいたいとの誓願が元になっています。そのことを忘れないでいただきたい」と力強く激励されま



フランズ幸雲師（右）



最後に、黒田住職は「人のために尽くせ、尽くして尽くして尽くし抜け、と何かにつけて先代から叱られました。そのことを心に置いて、これからも精進して参ります」と決意とともに現在の心境を述べて感謝の言葉としました。



禪マウンテンセンター法堂
先代方丈(左)と東老師(右)



法語

梅花馥郁白純身

父子相逢武志春

誓願尤堅禰法晁

慈光普照德風新

謹惟相值

当寺開山栴庵白純老大和尚

二世中興大圓武志大和尚 報恩法会之辰

惟時 当寺堂頭博志老師

拜請 本寺大田原市大田山

光真寺三十七世俊雄老大師

欲嚴修開山忌 偶本寺老大師臥病床 依堂頭老師

之命 野衲 寄為其名代宰此法会

疇昔 即昭和二十九年當時 野衲

修嶽山僧堂裡一雲水首座寮辦事配役

此時在白純老大和尚本山副監院要職 屢々恭銘茶

銘菓之御愛顧 雖去今五十八年之往昔 尚難忘

開山老大和尚者 實我宗門 日本仏教会希有大先

達也



故前角博雄老師のご家族と共に

建立新寺四箇寺 復興末寺四箇寺 設立学校幼稚園
 全日本仏教会事務総長 大本山總持寺顧問
 曹洞宗宗議會議員等々

周知事実 無枚拳暇 人天衆前菩薩化現

又二世中興武志大和尚者 創設善光寺留学僧育英

会 就任初代理事長 与我大学 大学院 同学同

窓 最上親友 默契握手 破顔微笑 皮肉尚暖

正与麼時 如何瞻仰 開山老大和尚 二世中興大

和尚真位

唵

成寿山頭 春二月

善光寺庭 瑞祥鮮

慈悲容納

平成二十四年二月十日

横浜市 善光寺 開山忌

焼香比丘 加賀 大乘寺

東 隆眞 謹書

授衣式



住職より総代各位へ感謝の意を込めて
絡子の授与式が行われました。



カラ	―	■開山忌・第二十五回育英会辞令交付式	1
法	話	●住職法話 春彼岸法要「春彼岸」	14
法	話	●「共に生きる」	23
連	載	●『普勸坐禅儀』に学ぶ その六	30
読	物	●「こころは見える」	40
インタビュー	●	「共に歩む」総代さん紹介① 熊谷豊太郎さん	54
カラ	―	■山内行事・寺檀一体の諸行事紹介	57
読	物	●僧形文殊菩薩像 開眼	61
	●	六波羅蜜	64
	●	善光寺霊園ニュース	77
	●	ニュース・アラカルト	86
	●	坐禅会・写経会のお知らせ	96
育英生からのおたより	104	声	108
		読者のたより	118
		編集後記	126

題字・イラスト 伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職 黒田博志

東日本大震災で被災された多くの方々に心よりお見舞いを申し上げ、不幸にして亡くなられた方々に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。またいまだ行方わからない方々をお待ちのご家族、ご親類・縁者の皆さまの心中をお察し申し上げます、衷心よりお見舞い申し上げます。

三・一一を遡る事二ヶ月、私は新命住職として晋山式を執り行わせて頂き、横浜善光寺第三世として法燈を継承し、ご縁の皆さま、多くの檀信徒の皆さま方に披露させて頂きました。住職としてこの大震災を目の当たりにし、「師父が存命中ならどのように行動し、尽したであろうか？」と思いを馳せるとき、自ずと自分の無力さを痛感させられました。

しかし、心落ち着かないながらも「脚下照顧」と自らに言い聞かせ、「自分の出来る事を只管（ただひたすら）に行じていくのみ！」と心に誓い、日々を務めた一年でした。

師父の七回忌法要。その報恩行として晋山式に臨み、以来、一年を経て、『い

まごころ』にある自分。省みてあまりの拙さに反省するばかりです。予期せぬ事柄が山積する寺の日々は、法燈を護る事がどんなに大変な事かを痛感させられます。寺の行事にしても、これまでは高僧、名士の方々をお招きして、ご法話やご講義などを頂戴しておりました。しかし、晋山式以来、総代の総意として、全て、新命住職の役割と責任になることを厳命され、逃げ道を閉ざされ、本当に難儀しました。その都度お檀家さまには、我慢のご拝聴賜り、ありがとございました。師父の残した諸氏の方々は、常に私に厳しく接して下さいます。

悉くが無我夢中や必死さだけでは勤まらないのが寺の住職。この一年、私は師父のうしろ姿を想い出し、マネする事に没頭して参りました。しかし、わかって

いる『つもり』、知っている『つもり』なだけで実が伴いませんでした。真に辛酸を嘗め、耐えて忍んで行を尽した師父との差はあまりに歴然としており、万分の一も届かなかったことを骨身に沁みて感じました。

私はあらためて初心に還り、一期の仏道に専念する決意を固め、新しい心と誓いを以って、師父の理念、「祖師を通して釈尊に還る」を胸に檀信徒の皆さまとの絆を太く長くつなげ、善光寺が少しでも皆さまの心のやすらぎとなるように精進して参ります。

どうぞ四方の皆さま、一層のご教導、ご鞭撻賜りますよう心よりお願い申し上げます。

■平成二十三年三月十九日

住職法話 春彼岸法要

春彼岸

善光寺住職 黒田博志

皆様御元気でござ詣なによりでございます。

「暑と寒さも彼岸まで」という諺があります。

御承知の通り彼岸は一年に春と秋二回巡って参ります。春分の日と秋分の日それぞれ前後三日間、あわせて一週間が彼岸という行事でございます。

この、二度の中日は太陽が真東から真西に沈みます。太陽の沈む方向に極楽浄土があるということから、日本ではこの日に浄土を想い亡き方をしのぶ日になったとも言われております。

太陽が沈むその先にある西方浄土に思いをはせた私たちの祖先は、太陽の恵みを受け、自然の流れの中で生活をし、その中には人間の力の及ばないものに対する畏敬の念が多く培われておりました。

またこの日は、昼と夜の長さが全く同じこの不可思議な現象と事象に感謝と報恩の念を尽し、神仏に敬意を払って参りました。

八百万（やおよろず）の神と言われるほどに多くの神仏を礼拝し、たとえ一本の木や小石ま



でも願いをかけ、祈りを込めることができる感情の豊かさ。四季折々めぐり来る風土で農耕し生活してきた社会に由来しているとも言われ、国としても、この日を祭日として定め、祖先に感謝し自然をたたえ、生物を慈しむ日だとしています。

民族学において、お彼岸は太陽を拝し、感謝と願をかけ、この期間目に見えないご先祖さまに思い致して報恩感謝の誠を尽くすという意味から墓参りであったり、寺詣りであったり、仏前にお参りするというのがお彼岸の慣わしとなっています。

このお彼岸会という「祀りごと」は日本独特の文化なのです。

仏教の始まりは約二千五百年前にインドで興り、中国を経て日本に伝来したと言われています。しかし、インド、中国ではお彼岸にお寺参

りやお墓参りの習慣はないのです。この習慣は日本独自の行事なのです。

その起源は聖徳太子さまの頃と言われておりますから約千四百年にも亘る年中行事となっているのです。仏教が日本に伝わりましたのは六世紀半ばと言われています。その頃初めて仏教を深く理解し、人々の信仰心を篤くなされたのが有名な聖徳太子さまです。

聖徳太子さまは生き方の指針「十七条憲法」を制定し、その第一条に論語の中から「和をもって貴し」と示し、国家の役人として政務にあたる上での心がまえを説くとともに、第二条では仏教より「篤く三宝を敬へ」として、仏法を信じ敬うべきことを強調しております。これが日本國の憲法の始まりです。

ご存知の方もいらつしやると思いますが、善光寺に太子像をお祀りしておりますが「どこに



あるかご存知の方？ ハイッ！

「そうです。仰せの通りこの釈迦殿の一階の正面右側に安置してあります」。

師父は、聖徳太子さまは日本で最初に仏教を深く理解し広めたお方、そのご恩に報いる為にお祀りし毎日感謝のまことを捧げ尽くしております。私もそれを受け継ぎ毎日読経供養させて頂いております。

さて、このお彼岸に実践しなければならぬ六つの徳目がございます。

それを「六波羅蜜」といいます。この徳目は、皆さまが、実践可能なものでなければなりません。古代インドのサンスクリットでは、「パラミター」と発音し、日本では「波羅蜜多（はらみた）」と読みます。この意味は、到彼岸であり、彼岸に到るとなります。

六つの願い

あたえよう、物でも心でも（布施）
生きよう、人間らしく（持戒）
耐えよう、どんなことにも（忍辱）
努めよう、自分の仕事に（精進）
おちつこう、息ととのえて（禅定）
目ざめよう、仏の道に（智慧）

ろっばらみつ
六波羅蜜多

おや、これは『摩訶般若波羅蜜多心経』ではないか？とお気付きと申します。そうなんです、この心経は「彼岸に行こう」という教えなのです。この六度が実践項目であり、仏教徒の目標なのです。いかがでしょうか。

一つには、「布施」です。

布を施すと書きます。

皆さまもこの言葉はよく耳にされると思いますが、布施とは、施すことなのです。一般的には、在家の皆さんがお坊さんに財物を施すことだと考えますが、これは「財施」といい、布施の一部です。お坊さん相手ではなく、他人にやさしさやいたわり、笑顔やことば、手を供えるのも立派な布施なのです。大事なのは、相手に恵んでやるという気持ちは布施ではありません。布施とは、「させて頂く」心なのです。思いやりであり心遣いなのです。

今盛んに公共広告機構より「思いやり」「心遣い」いずれも目には見えないが、行動すれば見えると、盛んに放映されています。まさしくこれが布施なのです。

二つ目は「持戒」です。戒めを持つと書きます。

この徳目は、戒めを守るということです。人としてのルールを守ることが大事。しかし、戒を完全に守ることは過酷で不可能です。大事なことは、破った時の懺悔と反省の気持ちの在り方です。

日本の仏教では、僧侶に求められる菩薩戒という十六の戒めがございます。上座部仏教のタイでは二百二十七の戒めがございます。それはもう、非常に厳しく立つも坐るも、食べるも、眠るも、大変なことです。

三つには「忍辱」（にんにく）です。

この言葉は食べるニンニクではありませんよ。忍ぶ辱（はずかし）めると書きます。

寛容な心を持ち、いかなる境遇にも耐え忍ぶことです。

お釈迦様は、人生は苦であるとお示しになりました。「四苦八苦」という語源はここからだと言われています。殊に私たちが生活している世界を「娑婆」と言い、「忍土」とも言っている世界にはとても辛い所です。他人から受ける迷惑をジーンと我慢して、耐えて忍びつつ生きる。そして他人を責めず、赦（ゆる）しながら生きる。これが忍辱だと申されているのです。

とても難しい境遇であり、徳目なのです。心するだけで大変なのです。だから、置かれている立場立場で精一杯勤めて行くのです。

師父は私に、よく「人生は我慢だ」と言っておりました。子供のころよく師父に叱られ、そ



の都度泣いておりました。すると時折、師父は私に向い「人生とはなんだ？」と聞きます。わけのわからないまま、泣きながら「人生は我慢です」と答えると、「では泣くな」と言われました。

時として逆に「博志、我慢しなくてもいいんだぞ」とも言われました。要は心の持ち方を教えてくれたように今は思います。

人に我慢を強いるのは、難しくありません。しかし、強いる側に余程な思い遣りがないと届くものではありません。やりたいことをやるな、やりたくないことをやれと強いるのですから。当時の私には「あべこべ」「ちぐはぐ」「全くいじめ」としか思えませんでした。しかし、この師父の薫陶が、私の欲望を抑制する心を養ったように思います。心の持ち方で、地獄にもなり、極楽にもなる。娑婆で生きることが、とても大変なことでございます。

四つには「精進」です。

精らかに進むと書きます。この言葉は皆さまもよく耳にしますよね。

怠ることなく一生懸命努力することです。何のために努力するのか、大事なことは目的地、到達点や結果ではないのです。一步一步あゆんでいるその歩み。毎日毎日の生活、それこそが大事なのです。おろそかにしない努力。これが、精進だと思ふのです。

通説では、一心に仏道や仏事を修めることだといわれます。また肉食しないことも、精進、「お精進」と言います。

五つには「禪定」です。

禪を定めると書きます。

この語は、心を穏やかにして真理を見極めることです。

心を穏やかにするというのは、意外と難しい。

仏道で言う禪定とは、精神を統一することを言い、迷いを断ち感情を鎮め、真実の仏道を求めて、こだわりや、とらわれから解放されることを言うのですが、簡単に参らぬのが常です。あれこれと心が動きすぎるのです。

油断しますと、自分のことばかり考えてしまいます。周囲を慮る心に欠けてしまうのです。

私の日課は二つあります。坐禅と写経を毎日勤めることです。坐禅は時間が許す限り、朝晩勤めることにしています。

心掛けていることは、

一つには「調身」。身を整えることです。背筋を伸ばし右にも左にも片寄らずまっすぐに坐ること。

二つには「調息」。呼吸を整えることです。一つ一つの呼吸を丁寧にお腹を意識して深くゆっくりと行うことを心掛けています。

三つには「調心」。姿勢と呼吸を整えれば自然

と心も整って参ります。

これがまさに禅定なのです。坐を移し日常業務に追われますと、すぐ心が乱れて参ります。残念です。

そしてもうひとつは「写経」です。文字通り經典を写すことです。善光寺でも毎月「般若心經」の「写経会」を行っていきます。字数は二百七十六文字でございますので、一時間はかかってしまいます。日々、私の写経は「延命十句觀音經」を謹んでおります。これは、わずか四十六文字です。だいたい十五分前後で尽くすことができます。

私は僧侶です。もしも私が日々の坐禅を怠るようなことになれば、私は禅僧ではなくなりません。これは、禅僧として生きる私の基本であり、使命だと信念し、院代と共に少なくとも禅定という徳目の実践に精進しています。こここのころを、師父も厳しく申しておりました。



六つには「智慧」です。

この徳目は、物事を正しく判断し、処理する心の働き、すなわちものの道理を知る賢明さを培うことです。

これは前の五つを実践することにより自然と身につけていくものだと教えて頂きました。今こうしてお話させて頂くのも智慧の一部です。

智慧は「般若」ともいい、インドの言葉では「パニニヤー」。いわゆる「般若心経」のことだと教えています。いかにも善悪の業や因果の道理を説いてくれます。従って仏教は智慧の宗教だと言われる由来はここにあり、事実を事実として正しく観る目を養ってくれるのです。

仏教の魅力もここにあるのかもしれない。

私も日々悩み苦しんでおります。研鑽が足りないのだと思っています。人はなぜ生まれて来たのか、どのように生きていかなければならないのか、

真実の幸福とはいったいなんなのか。そうした根本の問題に足踏みしているのが現状です。

智慧が乏しく足りないのです。この一週間一日ひとつの徳目に傾注し、合わせて六波羅蜜、皆さまと共にこの徳目に取り組み、智慧を高めて参りたいと思っています。

どうぞよいお彼岸をお過ごしになられますように。

ご清聴誠にありがとうございました。



■平成二十三年五月一日（日）

曹洞宗神奈川県第二宗務所第五教区 教区三佛忌法要「降誕会」にて

「共に生きる」

善光寺住職 黒田博志

本日降誕会にご参詣賜りなによりでございます。ご紹介頂きました港南区の善光寺でございます。

善光寺は横浜市営日野公園墓地の入り口にあり、霊園には「美空ひばり」さんのお墓もございます。この度ご縁を頂き、降誕会に因みお話をさせて頂きます。何分不慣れでございます。温かい眼差しで、私の話が下手でもたまにうなずいて頂きますと、とてもありがたいです。何卒宜しくお願い申し上げます。

降誕会は「三佛忌」の一つであり、仏教徒にとってもっとも大切な祀りごとのひとつです。

お釈迦様のお誕生日

お釈迦様がお悟りになられた日

お釈迦様がお亡くなりになられた日

この三つを合わせて三佛忌と申します。

さて皆さま、それぞれ何月何日かお分かりに

なりますか？

お生まれになられた日は「降誕会」と申しまして四月八日。

お悟りになられた日は「成道会」と申しまして、十二月八日。僧侶にとりましては、十二月一日よりこの日まで臘八大接心と申しまして坐禅三昧にとりくんでおります。

お亡くなりになられた日は「涅槃会」と申しまして、二月十五日。

それぞれの日にお釈迦さまを偲び尊んでご法要やお祭りをするのが習慣です。また、私はしばらくの間、三佛忌は世界共通の日だとばかり思っていました。キリストのお生まれになった日は、クリスマスとして十二月二十五日、世界共通ですね。お釈迦さまもそうだと思っていました。ところが、国によって違うことを数年前に知ったのです。

上座部仏教の国、タイ。国民の九十五%が仏

教徒。成人になれば必ずと言っていいほど、ほとんどの男性は出家し僧侶になるのです。私も十一年前、タイで修行させて頂きました。

タイでは三佛忌がすべて同じ日に生誕、成道、涅槃と同時進行しているのです。仏教の暦（旧暦）で第六の月の十五日、満月の日となっております。今の暦ではちようど五月です。今年は十七日が満月になります。

タイでは、この日をウエサカブチャーといい、行事では僧侶も信者さんも共にお祝いをいたします。人々は合掌し花と蠟燭と香を持ち、お釈迦さまの周りを右回りに三周いたします。その後お拝をし、お経を唱え、和尚さまの御説法を頂くのです。

お釈迦さまの周りをグルッと廻るといふのは、お釈迦さまのお徳を称え、尊敬の意を表す作法。先ほどのご法要でもお経を唱えながら方丈様方が本堂内を廻っておられました。同じ作法な

のです。

お釈迦さまがお生まれになられた時のことは
様々な説がございますが、今からおよそ二五〇
〇年前と言われます。

インドの北側、現在のネパール、タライ地方
にカピラヴァストゥという小さな都市国家がご
ございました。当時、お釈迦さまは、その国を治
めていた釈迦族の王子としてお生まれになっ
ています。

お釈迦さまの母親はマヤーさまというお方。
なんだかイエス・キリストの母・マリヤさまに
似ています。臨月に入ったマヤー夫人は、お
産のために、実家があります隣の国まで向かわ
れます。その途中、ルンビニー園という綺麗な
花が咲き乱れている楽園にお立ち寄りになられ
ました。たくさんのお花がしなだれるひと枝を掴
もうとしたその刹那、お釈迦さまがお生まれに

なったとい
うのです。

ところが、
お釈迦さま
の母・マー
ヤー夫人は
産後一週間
でお亡くな
りになられ
たのです。

お釈迦さま
はお母さま
の尊い犠牲
によってこ
の世に「生」をお受けになった。

このように、お釈迦さまが花園でお生まれになられたことに因み、降誕会を花まつりとしてお祀りするようになったと言われております。





私たちが親しんでいる花まつりでは、生まれ
たばかりのお釈迦さまの像に甘茶を灌（そそ）
ぐという儀式があります。その由来は、お釈迦
さまがお生まれになられてすぐに、天から甘い
雨が降り注ぎ、お釈迦さまのお身体を綺麗に洗
われたという伝説によるものです。一般的には
産湯というものでしょうか。

また、お釈迦さまはマーヤー夫人の右脇下か

からお生まれになられ、すぐに東西南北に七歩歩
まれ、片方の手を天に、もう片方の手を地に向
けて、「天上天下唯我独尊」（てんじょうてんげ
ゆいがどくそん）とお言葉を発したと言われて
おります。

「天上天下唯我独尊」という言葉の意味は、
「宇宙間に自分（仏道）より尊いものはないと
いう」意と、『広辞苑』や『大辞林』にも示し
てあります。天にも地にもわれ一人。これを
「自分が一番偉い」と、独りよがりの驕り、高
ぶりの発言と曲解される向きもありますが、自
分とは、一人ひとりの人間とその命を示してい
るのです。

お釈迦さまだけが唯一無二の存在だというの
ではなく、皆さまお一人お一人が「天上天下唯
我独尊」なのです。すべての人が代わることで
できないかけがえのない存在であり、お互いに
大切にしていかなければならない尊い存在であ

るという意味のお言葉になります。

命の尊厳、尊さを説いているお言葉です。道元禪師さまはこの所、「生を明らめ、死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」と現わされています。

先ほど皆様と共に「東日本大震災」でお亡くなりになられた方々への供養を勤めました。

三月十一日午後二時四十六分、宮城県沖を震源とする未曾有の大地震。その後巨大津波が発生し、すべてを消失させ、原発の建屋をも破壊し、今もその被害には目を覆うばかりです。

見えない未来への恐ろしさ、不測の事態は、私たちが予期しない、準備しない時に突然やってくる。この尊いそれぞれの命をどのように守るのか。

この時ほど、命の儚さを感じたことはありません。テレビ中継や被災された方が自らの命を

削って撮影されたビデオが繰り返し放映されましたが、津波の様子は本当に衝撃的で、今でも脳裏から離れません。皆様も心を痛めておいでのことと思います。この事象は未曾有で、いまだかつて地球上で誰も経験した者はなかったと言われます。

大震災の数日後、私がお墓掃除をしていますと、お参りに来られたお方が、

「方丈さん、先日の大震災、今でも信じられません。親戚が宮城の石巻にいます。まだ連絡が取れません。不安で仕方ありません。どうしたらいいんでしょう。仏教ではこんな時ただ我慢しなさいと説くのですか？」と質問されました。

私自身、その時点では備えも、心の整理のついでにない時でしたので、ただただ同じ思いに、胸の痛みを感じるばかりでした。

私は申し上げました。「信じて下さい。きつとみ仏は、守って、救ってくださいます。大丈夫です」と。これが精一杯でした。天も仏も神も自然も私たちに決して優しくはないのです。試練を与えてくださるばかりです。負けてはいけません。そんな思いがいたしました。

道元禅師さまは、「同事」という教えを示されていらつしやいます。「同じ事」と書きます。「同事」とは、少しでも相手の立場に成り切る努力をすることを言います。

同事をしるとき、自他一如なり

同事とは、自分と他人の区別がなくなり、ひとつになることです。相手の姿に自分自身を重ね、自分自身に相手の姿を認め合いながら共に生き続けるという願いを行じて行くことです。

果たしてあの時、私は「同事」の心になっていたのだろうか。

先日、ニュースで寄せられた義捐金の報道を耳にいたしました。今、二千億円が日本赤十字社に集まっているということです。これは莫大な金額です。国民一人当たり約二千円は送っていることになりました。この短期間にです。国民の皆さまが被災された方々に思いを運び、共に生きていこうという意志の表れだと思えます。これこそ「同事」だと思えます。

震災により、開催が中止か戸惑っていた春の選抜高校野球。しかしこんな時こそ「負けない日本」を示すべきと予定通り開催されました。

心に残った「選手宣誓」の言葉をご紹介します。て頂きます。

宣誓！

私たちは十六年前、阪神・淡路大震災の年に生まれました。

今、東日本大震災で、多くの尊い命が奪われ、私たちの心は悲しみでいっぱいです。

被災地では、全ての方々が一丸となり、仲間と共に頑張っておられます。

人は仲間に支えられることで、大きな困難を乗り越えることができますと信じています。

私たちに、今、できること。それはこの大会を精一杯元気を出して戦うことです。

「がんばろうー日本」

生かされている命に感謝し、全身全霊で、正々堂々とプレーすることを誓います。

平成二十三年三月二十三日

創志学園高等学校野球部

野山慎介主将

震災よりわずか十日余り、不安と悲しみに暮れていた吾々に生きる勇氣と力を示してくれた高校球児。共に戦い、負けない心。今できることを精一杯行うこと。方向を示し、助け合うという思いに灯をともしてくれた選手たちに、「ありがとう」と申し上げたい。

私たちも今、一緒になって共にこの境遇に負けないように今できることを、精一杯努めてまいります。

ありがとうございました。



〈連載〉

『普勸坐禅儀』

に学ぶ

その六

駒沢女子大学教授 安藤嘉則

〈本文 書き下し文〉

心意識の運転を停め、念想観の測量を止めて、
作仏さぶつを図ること莫れ。

〈現代語訳〉

心のハタラクキをやめて、念想観という思い図
ることもやめて、仏になろうとしてはならな
い。

ここでは坐禅をする際の心のありようが示さ
れています。前回までは坐禅をする条件として
静かな部屋とか適度な飲食といった条件を整え
ることが強調されていましたが、ここでは修行
者自らの心のあり方について説き示していま
す。

まず「心意識の運転を停め、念想観の測量を

止めて」とありますが、端的に言うならば、心の分別のハタラキを停止することです。最初の「心意識」という言葉については、大乘仏教の唯識哲学の説（すべてのものは心によって成り立つという学説）で説明されることがあります。すなわち「心意識」のうちの「心」は阿頼耶識（根源の意識）、「意」は末那識（自我意識）、「識」は六識（眼耳鼻舌身意の認識器官によって得られた認識）というように別々にあてはめて解釈するものです。そうすると阿頼耶識という根源的な心の働きまでも停止するということになります。しかし阿頼耶識は我々が意識しようとしまいと働く根本的な識なので、それを停止することはできません。

この阿頼耶識は心理学の分野では二千年近くも前に仏教における「無意識」の発見として評価されているとのことです。たとえばある人は少し前屈みでつかつか歩き、その人特有の調子

で語っていますが、これは意識しているわけではありません。長い間の積み重ねで体の姿勢・歩行・口調が規定されているのですが、こうした身体的行動までも我々は無意識の世界を支える阿頼耶識に基づいていると唯識仏教は考えるのです。これは玄奘三蔵（三蔵法師）によって中国に伝えられて法相宗が成立し、これが奈良の薬師寺・興福寺、京都の清水寺などに伝わっています。

ただし、この『普勸坐禅儀』の一文ではこのような唯識哲学の術語として細かく心・意・識を解釈すべきではなく、原始仏教から用いられてきた、こころの同義語として心・意・識を理解すべきでしょう。

また「念想観」という言葉ですが、「思慮分別をめぐらしてある一つの観念をすること。四念処、九想、五停心観などの精神活動のことをいう」（『新版禅学大辞典』）という説明がなさ

れています。これは江戸時代の注釈『坐禅用心記不能語』に基づいた解釈ですが、ここでいわゆる四念処しねんじょ、九想くじょう、五停心観ごじょうしんかんといった精神活動は、坐禅するとき、特定のイメージを心に思い描いて、それに集中する瞑想法のことです。

いわゆる「観法」とか「観念」というのは、インド仏教で盛んに行われてきた瞑想法です。

最近南方仏教のヴィパッサナーという瞑想法が注目されています。日本ではスマナサーラというスリランカ上座部仏教の長老がテラヴァーダ仏教協会を設立し、東京の渋谷区幡ヶ谷に道場を構え、大勢の人々がその瞑想法に参じています。このスマナサーラ長老は『般若心経は間違いない?』というような本を出版したり、芥川賞作家の玄侑宗久師をはじめ日本の仏教関係の人たちと対談集を出したりしています。横浜の朝日カルチャーセンターにも毎年講話に来ています。私も一昨年の幡ヶ谷のゴータミー精舎(道

場)にうかがい、長老の説明にしたがってこの瞑想をさせていただいたことがあります。スロームーションで呼吸を整えて進んでいくのは禅寺の経行(きんひん)によく似ていました。また、お経の中には、いわゆる禅観経典というインド仏教の瞑想の仕方を説く經典があるのですが、そこに書かれてある慈心観という観法をこの道場で実際にやってみて、大変参考になりました。

ここでテラヴァーダ(上座部仏教)の瞑想法について思ったことは、瞑想中の姿勢や作法のことです。それは南方仏教ではあまり姿勢や作法にこだわらないということです。南方仏教では坐禅の姿勢よりも如何に心が集中して瞑想するのかという点が最重要とされているようです。タイのアユタヤの修行寺にうかがったとき、瞑想中の人を何人も見かけましたが、それぞれが境内の各所で思い思いに坐って瞑想をしてお

り、その姿勢も日本の坐禅のような、背筋をピンと立てて威厳のある姿には見えませんでした。

日本の坐禅では姿勢を重視する傾向があります。昭和の名僧澤木興道老師が天草の宗心寺というところで修行時代を過ごしていた頃、ある日寺の者が外出して一人で留守番をしていたとき、いつも「小僧」「小僧」と見下していたおばあさんが本堂で一人坐禅していた若き澤木老師に対して、まるで仏を拝むごとく手を合わせたそうです。その様子を見て、澤木老師は坐禅する姿の功德を知ったと自叙伝で述べておられます。

日本の禅寺では坐禅堂に入ってから、「単」という坐禅をする畳半畳（もしくは一畳）に至り、足を組むまでにさまざま作法があります。そして坐禅中の姿勢も腰骨を立てて、坐蒲にどっしりと坐り、猫背になつたりすると、すぐに腰骨を立てるように指導を受けます。また坐禅

をする場合、一人で行うよりは、決まった時間に坐禅堂などのしかるべき場所で、一斉に坐るのが一般です。確かに僧堂なので整然と雲水たちが坐禅している様子は、澤木老師の場合ではなくとも荘厳なただずまいを感じます。

ただ一方において、逆に結跏趺坐などのきちんとした姿勢をしてみれば、それでよしとする傾向がないわけではありません。外からの坐禅の見栄えを気にして、肝心の心の中の課題がおろそかになるならば本末転倒となりましょう。道元禪師は坐禅そのものが仏行、仏としての行いであるとされましたが、真に仏行としての坐に徹することと、外から如何に見えるのかを意識する坐禅とは異なります。

実は念仏という行も、心にありありと仏を観想するのが、インド仏教で説かれる本来の念仏です（これを観想念仏といいます）。文字通り仏を念ずるのです。しかし心の中でこれを維持

するのは難しいのでしょうか、日本の浄土仏教では「南無阿弥陀仏」と口で唱える念仏（口称念仏）にとつてかわられるようになります。こちらの方が口で唱えるだけなので、だれでもできる行いであるとして、易行道（たやすい実践の道）として浄土宗で尊ばれるのである。これも内面よりも外から見える行として定着させる日本仏教の特質です。外から見えるカタチを重んじるのは日本の型の文化の影響から来るのかもしれません。

さて『普勸坐禅儀』の「念想観」の言葉の意味について戻りましょう。この語の解釈については、観想という意味のほか単に心の分別のハタラキを示しているという理解もなされています。というのもこの文脈では「念想観の測量」というように用いられ、この「測量」とは「測」も「量」も心で「思いはかる」ことを意味します。すなわち『新編禅学大辞典』にも「思慮分

別をめぐらして」という記述があったように、具体的な観法としてではなく、念・想・観の三つの心のハタラキとして思慮分別することと解釈するのです。この「念想観」という一つの言葉を理解するにはいろいろ難しい問題を含んでいます。

こうした点をふまえて、改めて「心意識の運転を停め、念想観の測量を止めて」という一文を解釈するならば、あれこれ思いはかる心の分別のハタラキを止めてしまうこと、または具体的なイメージを描く瞑想をもはなれてしまうということの意味します。

ところで通常「思慮分別」・「分別」という言葉は、よい意味で用いられています。「思慮深い人」とか、「大人であるならばもう少し分別をもちなさい」とか、「分別ある行動を」などという使われ方をします。それに対して無分別な行動というのは、社会的規範から外れた行動

として受け止められています。坐禅においては、なにゆえこうした分別のハタラクを否定するのでしょうか。

もちろん私たちは毎日思慮し分別しなければ生活はできません。さまざまな日常の場面において思慮分別することは、人として社会的ルールを守る上でも大切なことです。ただ仏教や禅では、この「思慮」「分別」は両刃の剣のようなもの（よい面と悪い面の両方がある）ととらえ、日常生活で必要だけれども、一方で迷いの根源にほかならぬとします。「分別」とは、心がある対象の一部を分けてとらえることにほかありません。ものごとの実物から一部分を切り分けることが「分」「別」ということなのです。たとえば授業を学生が聴講する場合、耳から先生の説明の音が、目には先生の書く板書が見えています。しかし耳や目は黒板や先生の声をキャッチしているだけではありません。先生の

声以外の廊下のざわめきやカラスの鳴き声などもキャッチするでしょうし、目は教室の黒板の近くにおいてあるもの（消火器やゴミ箱など）も映し出しています。しかしいろんな音が聞こえ、様々なものが見えながら、学生は先生の説明する声と黒板の字をその風景から切り取って認識しているのです。中には外のざわめきの方が気になって授業に身が入らない学生もいたりします。

また同窓会などの集まりで何百人が集まっても、自分に関わり合いのある十数人かの人しか認識できないでしょうし、その中にもし心ときめく人がいたら、頭の中はその人だけなどということもあるのではないのでしょうか。そういう意味でこの世界は自分が分別した世界、自分の心が切り取った世界であるといえるのです。

また、私たちは分別によって、まだ名前もつけられない「もの自体」について概念や名称を

付与して抽象化・概念化しています。たとえばある花について「バラ」と言葉・概念を結びつけます。それからこうした概念に基づいて、比較して判断をするのも「分別」のハタラクキです。つまり、人と比べて得をした、いや損をした、といったような比べて判断することも分別のハタラクキです。

これらはある特定の視点から（それは自分という視点から）ものごと自体から切り取って判断する作用であり、一般的にはそれが社会を生きていく上で有効なのですが、いったん概念化して比較するということがしばしば行われるのです。

その場合、それらが目盛りのついたものさしのようなものがあれば、数値化もしくは可視化されて便利です。たとえば人間を評価するのであれば学歴・地位・経済力・財産などが目に見える物差しです。こうした目に見る物差しは比

べるときに有効ですが、人間そのものの価値を評価するのに必ずしも有効であるとはいえません。これらは自分自身をもつ物差しではなくて、あくまで借りてきたものさしだからです。

「余生」という言葉があります。会社など引退した後の人生をこういいますが、果たして余りの人生なのでしょう、意味のない人生なのでしょう。借りてきたものさしである肩書きで生きてきた人にとっては確かに余生となりませんが、肩書きから離れた一人の人間そのものとしての生き方が問われるのが余生ではないでしょうか。

東京の芝公園の曹洞宗宗務庁で四年間禅教室で講師をさせていただいた時に川上忠志さんという能楽師の方と知り合うことができました。この方は「余生」ではなく「与生」という言葉をモットーに生き抜いた方です。この方はガンを患っておられましたが、一昨年駒沢女子大学

の授業で伝統芸能に触れる時間を設定し、この川上さんを講師としてお迎えしました。学生を前にして一時間もととうと話し続け、そろそろ実演をお願いしますと促されて能の実演を始められました。あの熱意ある講義には学生たちになにか伝えたいという思いがあつたのでしょうか。講義を終えると、控え室で倒れるようになぐつすりと一時間ほど休まれていました。その後、校門のところまでお見送りしましたが、川上さんは「また機会があれば来年もどうかよろしく」とほほえみをうかべて颯爽として車に乗られて大学を後にしました。さわやかに去っていかれました。翌月に亡くなられましたが、後で奥様にかがうと講義をした頃の川上さんは一切食物は採らず、点滴だけだったそうです。

この方の佐渡の正法寺というお寺のお墓にはこの「与生」という文字が石塔に刻まれています。正法寺は佐渡に流された世阿弥がいたお

寺ですが、川上さんが発起人となって「世阿弥供養塔」を境内に建立しています。私もその除幕式に行つてまいりました。その一門の能楽を拝見しましたが、演目が終了すると、全員が能舞台の上で、「願わくはこの功德をもつて普く一切に及ぼし 我らと衆生とみなともに 謡曲道を成ぜんこと」と合掌して唱えておられました。「普回向」の心を能楽という道にも活かしていこうということでしょうか。その意味で川上さんのいう「与生」とは他者に与えていく生、生き方といえましょう。川上さんは人生には余りの生はないととらえ、自分自身の生きる意味をこの言葉に表しています。それは他人から与えられたものさしに振り回されず、本日ただいまの私の命を生きていくことに他ありません。かけがえのない私の今日の命の尊さに気づき、何気ないこの一日を精一杯生きていくことなのです。最後まで精一杯生き抜かれた川上さんを

あえて紹介させていただきました。

川上さんも参禅なさっておられました。このような自らの人生に対する積極的な姿勢は、思慮分別にとられぬ坐禅のあり方から出てくるのです。このような心的態度が『普勸坐禅儀』では「作仏を図ることなかれ」（仏になろうとするな）という一句につながってきますが、これについては次号において解説したいと思います。

(続)





亥燈壁画
より



平成二十三年五月二十八日

善光寺 身代不動明王大祭にて 「私と論語」より

心ころは見える

東郷 敏

ありがとうございます。司会より大層なご紹介。分に過ぎております。檀家の一人、総代として時間をつとめます。もちろん僧侶ではございません。

この断髪は、「大圓武志大和尚が亡くなってしまいました」とのお電話に、驚愕し、取り乱し整理がつかず、そんな時に大和尚がご生前「オレがバリカン入れてやる」と言われた事を思い出し、四十九年間伸ばし続けた髪の毛をバツサリ切り、大和尚の枕元に置きました。

以来、全身を石鹸一つで洗う事ができ、経済

的にも時間的にもありがたいと思いい喜んでおります。

三月十一日、未曾有の大震災。

誰も経験した事の無い、地震・津波・原発の破壊。

「天災」と「人災」。複雑多重にからんで目を覆うばかりです。今、世界中から日本に「負けるなよ、頑張れ！」と声援や支援が届いております。

ご住職から「支援金を送ってください、物資

を送ってください」という指示のお電話をいただいで、善光寺として支援の態勢をとらせていただきました。

私に思いはあっても、具体的に動けない時分でしたので、ありがたいことでした。すぐ参加させていただき、四月八日、大本山を介して善光寺から皆様方のおこころづかいとご支援をま



とめてお届けしました。物資は日本赤十字を通して東日本の被災地にお届けできたという報告を受けました。

博志住職は、少なくともこれから三年間は続ける意志を示して下さいました。

動きが早い。「やっぱり善光寺はすごいな、黒田家のDNAはすごいな」と私は感服、敬服しきりです。

この時に思い出したのが「人のためにするはスプーンではなく、スコップでしろ」と論してくれた当寺の開基さんのことです。

以来、報道やメディアも状況が一変。表現もすっかり変わりました。また企業も売るということを置いて、コマーシャルを流さなくなった。民間放送とNHKがこぞって流し出したCMが、ご存じの通りAC（公共広告機構）のものが、これまでなかった大きな動き。

国と国民が一体になって「いま行動しようじゃないか」というテレビやラジオ。

公共広告機構が出している四つのCM。

介護車椅子を進呈した当事者の活動や子宮頸がんの早期発見と治療。

あと二つは、詩なのかコピーなのか、なにを言い、なにを訴えているのか……私も深く考え及ばずにただ、映像を見聞きしておりました。そんな時にハッと気づいた。

自身の在り方を示唆している。人間というは「人と人の間」人に対してどうあるべきか。心と行動の在り方を見事に謳いあげ見せつけている。

見ているつもり、知っているつもり、みなさんご覧になって、如何な思いでしょう。

「遊ぼう」っていうと

「遊ぼう」っていう。

「ばか」っていうと

「ばか」っていう。

あとで さみしくなって、

「ごめんね」っていうと

「ごめんね」っていう。

こたまでしようか、

いいえ、だれでも。

しばらく子供向けの詩だなど思っていたので
す。

いいえ「だれでも」だれでもは、私だったので
です。

「こころ」はだれにも見えないけれど

「こころづかい」は見える

「思い」は見えないけれど

「思いやり」はだれにも見える

繰り返し見ているうちに、漸く気づいたのです。私は気づくのが遅すぎていました。

何を求めているのか、日本の偉い人たちが、選んでテレビで流し続けている。

それが何かと言えば、仏語に言う「以心伝心」です。「自未得度先度他の心」と同義語です。

「ありがとう」というと「ありがとう」と返ってくる。

「嫌い」というと「嫌い」と返ってくる。

あたかもタライの中の水。手前から水を向こうに押すと向こうにぶつかって、はね返ってくる。「以心伝心」とはそういうことです。

自分が先に起す行動が、向こうからはね返ってくる。「こだまでしょうか、いえ、だれでも」ということになります。

これが人間の関係ですよと教えて下さったのが、有名な詩人 金子みすゞさんです。山口県の長門のご出身だそうです。

心のありようはこうだよ。つらい人がいたら、こちらもつらい気持になって、悲しい人には悲しんで「同事」の心を尽す。一緒にやろうじゃないかということですよ。

ここの本寺、栃木は大田原の光真寺さんも、地震で、瓦は落ちブルーシートに覆われ、墓石も全部飛んだり、ひっくり返ったり無惨だという。東日本は今、どん底、辛い思いを抱えています。

いま自分がなぜここに座っていられるかを考えてみるのです。お互い様、まぬがれて残していただいたいもの、この有難き、不思議に思いを致し、こだまになりますよう。

お互い様という間柄を高めて参りたいもので



す。

今一つ、

「こころ」は誰にも見えないけれど

「こころづかい」は見える。

「思い」は見えないけれど、

「思いやり」はだれにでも見える

……「あなたの心はどんな形ですか」と、人に聞かれても答えようがない。自分にも他人にも、本当に見えないのだろうか。

心づかいと思いやりは、何かといえば、行動力。行動して初めて相手に伝わってゆく。

これがどういふことなのかを、私の知る範囲「論語」を通して尽してみたいと思います。

「論語」は孔子の記録です。「大学」「中庸」「孟子」に四書と五経合わせて儒教の原典

になっています。

孔子の後百年、お釈迦さま誕生です。それから百年後、哲人ソクラテス、さらに百〜二百年後プラトン、アリストテレスそしてキリスト誕生です。ここに西暦〇年が位置しています。紀元前のことです。

何千、何万年という人間の歴史の中で僅かの五百年位の間、人間の精神的発達の起点・原点というものが集約されている。その心とは「おもいやり」であり「こころづかい」だということです。

いずれも「神」「仏」「哲人」と言われる方々です。

夫々理念は一貫共通しています。孔子は「仁」と言い、釈迦は「慈悲」、ソクラテスは「義」、キリストは「愛」と言いました。夫々他人に対する在り方。心を論し求めているのです。

論語の中に「子曰く、一以て之を貫く」とあります。その一とは「忠恕(ちゅうじよ)のみ」と言われるんです。

「忠恕」とは何かというのと、「己を尽くす、これを忠といい、己を推す、これを恕という」と説明しています。

道元禅師様も、これが究極の目的だとおっしゃっています。この心ができれば「よろしい」と。そのために行を尽くし、徳分を高める。その本心というのは「真心、嘘偽りのない自分の心」。人の為になるということです。このところ道元様は『修証義』の中で見事に説いていらつしやいます。

ここ不動殿の横一面に畳一枚分の大きさ、この掛軸に「成寿山」という書がありますが、落款がありません。先年、京都・清水寺の森清範

貫主が大圓大和尚の仏前にお参りされたとき、善光寺の隅々をご覧になり、「これはどなたの書ですか?」と問われました。「善光寺の開基(村岡満義)の筆です」とお答えすると。

森尻下は「ああ、そうですね。そうですね。」

見事な書です。お心と思いが沸騰しています」と仰ったんです。「覇気というか吸い込まれそうです。そうですね。開基さんの書ですか……」と。私は側において特に何も感じませんでした。森尻下は歳末の恒例行事、清水の舞台で「今年の漢字」をお書きになる達筆です。「達人は人を見る」んですね。

開基は本当に謙虚なお方でしたから、落款が欲しいと何回か先代方丈さんが頼みましたが、でも、「落款をつくほどの身分じゃありません」と結局つかれなかったんです。

私が勤めました会社に「社是」がありました。

これは『修証義』の第四章から取ったものです。「他人のために」。いわゆる「自未得度先度他心」という言葉です。

一言で「FOR OTHERS」。

この心があれば、企業も人間も必ず救われると道元様は仰っている。

余談になりますが、私がある時、山梨の駅前にミシン屋さんがありまして、当時は斜陽業種と捉え、私達の仕事をしてもらおうと思い、二カ月ぐらい通って大きな利益を手にする契約を結んだんです。

私の頭の中では、会社に帰って報告すれば、社長から「そうか。お前は偉い」とほめていただき、昇給、ボーナスに関わると喜んでおりました。しかし、私の報告を聞いていた社長は「君の話はいい事づくめ。リスクや問題、不利益が起きるかも知れないことを伝えず、君の口

車に乗せられた向こうの社長さんの立場になってみる。ボクは心配だよ！どうも君には『おもいやり』というものがない。どうだろう。君には悪いけど契約は撤回してくれないか」と言われました。

冗談じゃない。無碍に言い放つ社長に腹が立つ。でも仕方が無い。社員だから……。

早速に山梨に引き返し、向こうの社長さんに、この契約は私の都合ばかりで、お店のことを考えていない、とうちの社長から厳しくたしなめられたあるがまを申し上げて、お詫びをして、契約の破棄を願いだしたのです。

その話を聞いていた社長さん。「そうですね、承知しました。撤回しましょう。私は心配しておりませんでした。会社の大革新。投資が大きただけに心配がないというたらウソになります。この通り破棄しましょう」とビリ、ビリ……アツという間でした。契約書は粉々に。あ

まりの引き際のよさに施しようもなく、私の心の中にいささか期待するところがあつただけにガツクリと来たんです。

その場に留まる理由もなく引き上げようとした時、社長さんが「東郷さん、あなたの社長さんに私から電話させていただきたい。今宜しいですか」。それを聞いて、私は「違約金とられる、どうしよう！」と血の気が引きました。

仕方なく電話をお借りし大阪の社長に電話して「ご指示の通り、破棄出来ました。ご安心下さい」と伝えてから、店の社長さんに代わったんです。店の社長は丁寧に経緯や新しい業態への期待など話しながら「社長さん、東郷さんの話を伺い本当に安心しました。彼は立派です。改めて私の方から御社との契約お許し願いたいです。リスクも不利益も経営者の私の責任です。どうぞ経営のノウハウと製品を宜しくお願います」。

マコト状況は一変。あべこべになり、間もなく新しい契約書と共に新しい出発が出来たのです。

「心づかいと思いやり」。実に美しい結末でした。あれから随分になります。いまだに秋が来れば豪華なブドウと水蜜桃が届くのです。勿論私の功績ではありません。「おもいやりへの報酬」。開基であり社長の業績です。救われ続けたことに胸を厚くします。

みんな「恕」なんです。みずゞさんの詩ももう一つの詩も、「思いやり」と「心づかい」、少し違っただけで美しい間柄ができています。これがまさに「恕」の心なんです。

一人なら何も相手のことを思わなくてもいい。二人以上になったら相手のことを思う。これが論語の「終極」です。

電車に座っていると、お年寄りが来る。今の時代、年寄りが年寄りを介抱する時代。自分が相手より少しでも達者と判断したら少なくとも手を添え言葉を添えて、立たなきやいかんと思いたい。ただ思うだけでは駄目です。立って席を譲る行動が出来るかどうかです。

朝起きた時から意識するのです。お便所に入っても「恕、恕、恕」と口ずさむようになれば、少しは変われます。(笑)

挨拶をするのも恕。笑顔を施すのも恕。とにかく、人の喜ぶことに心を遣うは「恕」。

心はみえる

「恕」という心を行動で表現できれば、私たちは残された人生を変えられることができるかもしれない。信じて参りましょう。

インドのガンジーは「自分が欲しいと思ひ、

それを手にしたら罪悪です。いらぬものを手にしたら罪悪です。一杯ですむご飯を二杯食べたら罪悪です」と言っています。

余分なものを持つてはいけません。ここまで巡らしたら経済の発展も自分の成長発展も止まりそうです。偉いお方の話だから聞いて参りましょう。実際簡単な様でも難しい心です。

自分が自分のためだけにしていることは「恕」ではない。

『修証義』第四章のなかに「四枚の般若」という言葉があります。「布施・愛語・利行・同事」の四つ。愛語とは、慈しむ言葉が出せるかどうか。利行とは、相手が受益することに自分が手伝えることができるかどうか。同事というのは、相手と同じ立場に立てるかかどうかということです。



いま天皇陛下が東日本各地をお見舞いに訪ね歩いておられます。避難所で座ってる方には必ず自らも座られて、中腰の人には必ず中腰になられて、立っている人には立って同じ目線で。美智子妃殿下も必ず同じ立場でお見舞いなさっておられる。あれが「同事」です。同じ位置、同じ心、一体になることをお釈迦様は教えているわけです。

これが「発願利生」。この心ができたならば、自分が利益することができると教えています。善光寺ではいかなる行事にも『修証義』第四章を讀経しています。これは大圓さまの恕の意です。

キリストは『新約聖書』マタイ伝七章のところに、お釈迦様と孔子と同じことを言っています。

「人を裁くな。自分が裁かれないために、あなた方が裁く裁きで自分も裁かれる。偽善者よ聖なるものを犬にやるな。また真珠をブタに投げてやるな。そのものを理解して受け入れる用意と準備がない者にただ無駄に与えてはならない。求めよ、さすれば与えられん。探せ、さすれば見出すだろう。門を叩け、さすれば開かれる」。

有名な言葉ですね。また、「あなた方のうちで、自分の子がパンを求めるとに石を与える者はいない。魚を求める者にへびを与える者はいない。このようにあなた方は悪い者であつても自分の子供には良い贈り物をする」

「何事も人々からしてほしいと望むことを人々にその通りしてあげなさい。これは律法である。己欲せんとして他に欲せしめよ。己達せ

んとして、他を達せしめよ」。

怒であり同事のことです。このところ「他を救うに非ずして、己を助くるにあるを悟る」と言った偉人がありました。いかにも如何にも、さらに、

「狭い門から入れ。滅びに至る門は大きく、その道は広い。そしてそこより入って行く者は多い」

仏語では地獄のことです。

檀家さん四千軒のうち、この場に在るのはごく一部のお方です。これは「狭い門」です。ここに来られたということはすごいことです。キリスト的に言えば、ラクダが針の穴を通るくらい難しいところに皆さんは座っておいでなのです。

天にいますあなた方の父は必ず叶えてくださいます。ここにいらっしやる方は少なくとも「求めれば与えられ、捜せば見出せるのです」いままさに幸せへの途次にあるということになります。

いかがでしょう。道すがら「宝くじ」を買ってみませんか。(笑)

しかし、「主よ、主よという者が皆天国に行くわけではない。ただ天にいます我が父のみ教えを学び、行うだけの者が入り救われる」とある。

ただ「仏さん、仏さん」と言うだけでは救われませんよ。本当に良い心で、良い行いをする者だけが救われていきます。

どの神も仏も聖人も哲人も心の在り方をしっかりと導き逃げ道を塞ぎながら善導を試みて下さっています。

ここには偉いお坊さんや学者、宗教家がいっぱいいらつしゃいます。みなさんは私たちが在家や檀家のすべての光の基になっています。尊い方々を求めて寺に通う。僧侶の皆さんがさらにしつかり勉強して、私たちに人間のあり方、歩く方向を教えてください。ためには、よほど勉強しなければなりません。よほど修行しないとイケません。

『修証義』第五章は「行持報恩」となっています。

「行持」というのは、怨を持して、自分の手にした本心、真心を、怨という心を以って報恩しなければならぬ。自然の恵み、光の恵み、親の恵み、師匠の恵み、檀信徒の恵み、亡くなった人の恵み、そういう諸々に感謝報恩をすることが大事だと『修証義』は論じています。

『修証義』は道元禅師の九十五巻にある『正法眼蔵』から引き出したエキスです。それを勉強させていただいた結果、ここでこうして知ったかぶりで話もできる。これが学習したということですよ。

お坊さん方も、本当にお忙しいと思いますけれども、深く、広く、熱くご法話下さって、私たちが善導して頂きたい。これが私の願うことでございます。

「私と論語」という観点から大震災後の最中、天地動転の場に立って、どうする、どうしたらいい。国難の危機に立ち向かう気概でとりとめもなく尽させていただきました。

皆さまこれよりのち『大「怨」舞』（だいじよぶ）でしょうか？

ありがとうございます。



新企画として「総代さん紹介」のコーナーを設けました。

善光寺は開創以来「寺檀一体」の歩みを続けてきました。先代の大圓武志大和尚のもとで善光寺の基礎づくりに汗を流し、「仏道を通して世界の安心、平和、幸福に寄与しよう」という願いに共鳴して苦楽を共にしてきた総代さんたちは、仏法護持の諸天善神にも比すべき方々と言えます。

草創期から今日まで、善光寺の成長発展を支えてこられた総代さんお一人おひとりをシリーズで紹介します。

「いのち運」 いただいで生きてきた

熊谷豊太郎さん

善光寺の檀信徒で、この人の顔を知らない人

はいない。筆頭総代として四十年にわたり善光寺と共に歩んできた。「足腰が弱くなった。歩行困難なのが辛い。左の耳が駄目」と、わが身

の衰えを嘆く。だが、善光寺の行事で、この人が法要後に矍鑠かくしゃくとして挨拶する姿を見て、誰が九十五歳という年齢を想像できるだろうか。

北海道小樽市に生まれた。小学生の時、腸チフスに罹り、一年間入院。その後、製材業を営む父親の郷里・仙台へ移り、旧制中学を出てキリスト教教育を建学の精神とする東北学院大学の予科に入学。その頃、日曜学校にも通った。

昭和十三年一月、二十三歳で軍隊に入り、北朝鮮の羅南で教練を受けた。さらに中国北部、中部、フィリピン、シンガポール、ビルマと転戦し、昭和十八年、水戸で除隊。

戦地から帰ると、今度は企業戦士として活躍した。川崎に本社を置くプレス工業(株)に入社し、労働組合の執行委員長を約七年務め、係長に就いて退任。その後は副社長、常勤監査役などの重責を担った。役員として主に工場建設を手が

け、藤沢、尾道、川越、宇都宮と相次いで工場を拡張した。また地域の交通安全協会会長、県安全協会理事などを歴任し、警察庁長官から交通栄誉賞、緑十字金賞、また神奈川県知事から県民功労者賞などを受賞した。

善光寺との出会いは昭和四十六年十一月のこと。この年、母親が死去し、知人の紹介で先代の大圓武志大和尚に葬儀を依頼した。プレス工業の取締役に就任して二年目になる頃で、応接間に会社の幹部らが集まる席で、武志大和尚は母親の戒名を示した。いろいろと話すうちに、善光寺の総代になるよう請われ、回りの幹部からも推されて就任を決めた。

「現職の頃はとくに近くはなかったが、リタイアしてからは方丈さんといろいろ話すようになった。豪快で温かく、楽しい方で、お会いするのが楽しみでした。善光寺の開創二十五周年

記念行事を鶴見の大本山総持寺で開催した時、突然、司会をやってくれと言われ、戸惑いながら務めたことがある。以来、何かと相談相手となり、深くお付き合いさせていただいた。よくご馳走にもなりました」と回想する。

「いのち運はある」と言う。人生の途上、何度か生死の境を超えて生き延びた経験があるか



らだ。小学生の時の腸チフス、戦場では数多くの激闘を経験し、魚雷がわずかに外れて命拾いをしたことも。近年は心臓にペースメーカーを入れ、腰部狭窄症で入院した。

入院中、同じ病院に武志大和尚が入院していることを知る。その頃、すでに武志大和尚の病状は芳しいものではなかった。「なのに、自分のことは忘れて、早く退院しろと私を励まし、見舞ってくれた。その心づかいは忘れることができません」

最後に会った武志大和尚は、病床で眠っていた。平成十六年十二月二十九日朝、世寿六十七歳で遷化。遺体は、武志大和尚が両親を追慕して建立した梅嘉庵に運ばれた。あれからはや七年。月命日にお参りを欠かしたことはない。

▲「豪快で温かく、楽しい方でした」と

大圓武志大和尚を偲ぶ

山内行事



熊谷豊太郎 総代



住職と共に至心に読経

盂蘭盆会施食法会

身代不動明王大祭



各種坐禅会

老若男女みんなで
只管打坐

新年祈禱会

堂内を埋め尽くす参詣の人びと
今年一年 良い年に
なりますように……



お楽しみ福引き

そこにはいつも笑顔が満ちて

節分追儺法会

福はうち



福はうち

向かって左から

魁ノ鞍、魁ノ若、住職、魁聖関、魁ノ隆



僧形文殊菩薩像 開眼

平成二十三年五月二十八日 身代不動明王大祭。その良き日に新しい仏さまをお迎え致しました。僧形文殊菩薩像。僧侶の姿をされた文殊菩薩さま、坐禪堂の中心に坐られて我々を励まして下さる仏さまです。

寺檀一体の修業道場として、住職を始め若い僧侶が集う寺として、無事修行できますように、法を求める道に迷い無く精進できますようにと、ご安置申上げました。

開眼法要は本寺光真寺黒田俊雄老師を導師に賜り、報恩の一炷。

縁起

善光寺住職 黒田 博志

晋山式の前年（平成二十一年）に、東京の仏具店の翠雲堂さんから「先代さんから、ご生前にお預かりしていたものをお返ししたい」という趣旨の連絡がありました。

間もなく横浜の支店長さんが社員の方と共に担ぎ込まれたのが、直径四〇センチ、長さ六〇センチの一本の丸太棒。支店長さんのご説明によると、インド原産の白檀の原木だということでした。

堂内一杯にほのかな香りが漂う。これは希少の逸品。翠雲堂の社長さんが二十年以上も前に先代から預けられ、「いつの日か、この丸太でご仏像を彫って頂きたい。それまでしばしの間……」ということとで倉庫に眠っていたものだそ

うです。

先代の存命中にこの原木の存在は聞かされておりませんでした。こんな尊いものをお運び下さった翠雲堂の社長さんに心より感謝感服。

晋山式になくはならない「僧形文殊菩薩像」。その原木から見事に「仏さま」を彫り出して頂き、お不動さまの大祭（同二十三年五月）に併せて、開眼の法要を尽くすことが出来ました。

この吉兆はきつと、師父が「博志しつかり坐禅しろよ」との示唆。「叱咤激励」の贈り物だと観じ入っております。

長年原木をお預かり下さった翠雲堂さんには、厚く厚くお礼申し上げる次第です。



六 波 羅 蜜

浄土宗浄雲寺住職（第二回育英生） 安 井 隆 同

善光寺さんにお世話になって、インドに留学させていただいた大阪・乗雲寺の安井隆同と申します。皆さんとご縁をいただき、本当に感謝しております。

今日はお彼岸ということでお話しさせていただきます。

お彼岸は「彼（か）の岸」と書きます。私たちが右往左往して損した得したと生きているこの娑婆世界のことを「此岸（しがん）」と言い

ます。此（こ）の岸に生きて苦しんで、悲しみ悩んでいると、どこか幸せとか悟りとかが遠い向こうにあるように思います。だから「彼の岸」と書く。

坊さんが修行していても、悟りとか極樂はどこか遠くにあると思うんです。ところがそうじゃない。カール・ブッセの詩に「山のあなたの空遠く／幸ひ住むと人のいふ」とあります。みんな幸せとか悟りとかは遠くにあると思ってる。でも山の彼方の空遠くに行って、「幸せが



どこにあるのか？」ともう一度聞いてみたら「山のかあなたのなほ遠く／幸ひ住むと人のいふ」と言う。仏法の悟りもそうです。修行もそうです。

「悟りは脚下にあり」。悟りは自分の足元にあるんだ。るんですよ。幸せもあなたの足元にあるんだ。それに気付くか、気付かないだけの話です。幸せも極楽も悟りも、あなたの足元にある。でも私たちは、この世で金や名誉や地位や学問に惑わされて、彼方に幸せがあるように思う。

「彼氏」「彼女」の「彼」もこの字です。いい人は彼方にいる。私も目についた女房が鼻についてくるようになりました。目と鼻は距離が近いけど、どちらにつくかでえらい違いですね。

「彼岸」の原語はインドのサンسكريット語で「パーラミター（波羅蜜多）」と言います。正確には「到彼岸」（彼の岸に到る）です。「摩訶」とは計り知れないほど大きいという意味。

「摩訶不思議」の「摩訶」です。「般若」は「智慧」で「はかりしれない大きな智慧」によってパラミッタ、彼の岸に到る。心のお経が『般若心経』です。

だから、お彼岸というのは到彼岸、彼岸に到る。これがお彼岸の法要です。今日ここに集まって頂いた方には是非彼岸に行つて欲しい。そんなに距離は遠くないです。

お彼岸というのは日本だけの行事ですけど、「暑さ寒さも彼岸まで」と言うとおり、暑くもなく、寒くもない、太陽が真東から真西に沈む時です。昼と夜の長さもちょうど半々です。全てが頃合いのいい時なんです。「すべての頃合いのいいのが悟りなんだ」という仏法の教えでもあります。

人間は片寄っている。こたわって、とらわれて、苦しんだり、悲しんだり、悩んだり、損したり、得したりしてるだけの話であって、何で

もほどほどの時が一番の悟りなんだというのがこのお彼岸です。

仏法の悟りの境地も真ん中の道、「中道」であるという教えがあります。これを簡単に表した教えが一休さんの物語です。「このはし渡るな」と立て札を立てておいたのに、一休さんは堂々と渡った。「橋渡るな、と書いてあるのに、なぜ渡った」と言う、「いや、私は真ん中を渡りました」。だから一休さんは小さい時から悟りの境地に達していたということでしょう。

全てが頃合いのいいお彼岸に、私たちも静かに己を見つめると、お父さん、お母さん、ご先祖さん、世間さんのお陰が分かるはずですよ。ご先祖さんに感謝して、お墓参りもして、己を見つめなさい。どんなに名誉や地位や金があつて賢い人でも、お父さんやお母さんがいなかったら命もないし、ご先祖さんがいなかったら今の

家にも住めない。だから、このお彼岸に自分を静かに見つめなさいということです。

「今日彼岸 菩提の種を蒔く日かな」という芭蕉の句があります。「菩提」というのは悟りです。みなさん自分の心を静かに見つめたら、仏の心がありますよ。ひっくり返せば鬼の心もあります。その仏の心に気付いて、芽を出させるか出させないかです。

私は富山県氷見市の農家の三男坊に生まれました。これから農作物の種を蒔く時期です。静かに見つめたら、あなたの心にみんな仏の種があります。その芽を出させて下さい。

お釈迦さまは、悟りの道、極楽の世界へ行くには六つの修行方法があると説いて下さっています。それを「六波羅蜜」と言います。六つのパラミッタ、岸を渡る方法がありますよと。

第一は「布施」、施しです。何も坊さんだけ

じゃなくて、あまねく施しなさい。隣近所、困った人がいたら助けてあげなさい。施しをして、自分の徳を高めて、仏心の芽を育てなさい、ということですよ。

なぜ布施をお釈迦さんは一番最初に説いてらっしゃるかというと、人間は放っておいたら欲と貪りの心が雑草の如く生えてくる。だから欲と貪りの心を少しでも減らしなさい。そのためには困っている人に施しなさい。そうすると少しずつ欲の心が無くなって、悟りに近づいていく。それが「布施」です。ないようであるのが欲、あるようでないのが智慧です。

お坊さんが髪を剃ったり刈ったりしているのは、心は見えないので、心に生える煩惱の雑草を刈ることができないから、朝起きたら見える髪を剃って心を整理させて頂いてるんです。本当に剃るべきは「心の乱れ髪」です。放っておいたら貪りと欲の心が限りなく出てくる。普段



は聖人君子だけれど、目の前に金と物がぶら下がったら目の色が変わります。

お父さん、お母さんが亡くなって、金や財産があるところほど、無いと思っていた欲が出て、残った兄弟が他人みたいな喧嘩をしていますよ。人間の欲は限りがない。自分の貪りと欲が自分の幸せと悟りを一番邪魔しているんだ。その心を少しでも無くすために施しなさいということです。

次は「持戒」。慎みと戒めを持って生きなさい、ということですよ。これには五つの大きな戒、五戒があります。殺すな、盗むな、嘘をつくな、邪（よこしま）な男女関係は慎め、お酒を慎みなさい、という五つです。

ところが「殺すな」と言っても難しい。人や動物は殺さなくても肉や魚は食べる。坊さんは精進料理とかいって肉や魚は食わずに野菜を食

べると言いますが、野菜や果物にも命があるんです。生き物は他の生き物の命を自分の命として生きざるを得ない業を背負っている。だから「無駄な殺生をするな」ということです。全てを生かして使えというのが「不殺生」です。

無駄のない生き方を徹頭徹尾貫かれたのが、曹洞宗を開かれた道元禪師です。永平寺にお詣りしたら、一番最初の門に「杓底の一残水、流れを汲む千億人」と書いてあります。

どういふことかという、道元禪師は中国から帰って永平寺にいらした時、朝起きて弟子が桶に汲んできた谷川の水で顔を洗い、口をすすいで、桶に残った水を杓に移して谷川に返しに行った。水一滴たりとも無駄にしない。川下にいる人たちがその水を生かして使ってくれただろう、という道元禪師の教えです。

むかし日本では顔を洗ったり、口をすすいだり、風呂へ入ったりする習慣がなかったみたい

です。道元禪師が中国へ行つて、学んできてから日本に普及したということです。

同じような話が京都の臨濟宗天龍寺にあります。江戸時代の宜牧という小僧さんが、師匠の風呂を沸かしたら、熱すぎた。「宜牧、水持ってきてくれ」と言われて、つるべで水を汲んで持って行った。お師匠さんは湯をちよんどのいい加減にして、残った水を宜牧に渡した。宜牧はその水をその辺にぶちまけた。それを風呂の窓から見ていたお師匠さんは「その水を草や木にやったら草や木が生きるだろう。水も生きるだろう」と怒鳴り倒したそうです。

それから宜牧は修行に修行を重ねて悟りを開き、最後に天龍寺の管長さんになられた。その時に自分の名前を「滴水」とされたということ

です。 私たちは他の生き物の命を命として生きるといふ性を持っているけれども、無駄な殺生をせ

ず、慎みを持つて生きなければならぬ、という「持戒」。

次は「忍辱」、堪え忍ぶということです。辛抱です。私も若い時は辛抱できず、くっつかかっていたけれど、失敗ばかりでした。辛抱していたら、幸せもやってきます。忍んで忍んで、堪え忍ばざるをなお忍ぶのが本当の辛抱です。忍ぶのには自分が強くなければ忍べません。自分に弱い人はすぐ爆発する。

お釈迦さんの言葉に「千度戦場に出て千の敵に勝つよりも、己一人に勝つ方が真の勇者」という言葉があります。いい言葉でしょう。これが忍ぶということです。自分に勝たなかったら忍べませんよ。

次は「精進」。何でもいから一生懸命やりなさい、ということ。努力しても努力しても

なお努力足りぬのが努力なりけり」です。

野球のイチロー選手が世界記録を作った時のインタビューを耳にしたんですが、「小さな積み重ねが人をとんでもないところに持つていくのですね」と答えていました。イチロー選手は、大したことじゃないけれども小さなこと、基本的な決まったことを毎日途切れることなく実行しているそうです。

世界の頭脳と言われるアインシュタインも「私は決して天才ではない。一つのことを誰よりも長くやってきただけなんだ」と言っている。やはり精進です。屋根から落ちる一滴の雨つぶでも石に穴を開けます。それが精進ですよ。

人に見てもらおうとかじゃない。日常の、人が目もくれないようなことをコツコツと積み重ねていくのが精進です。

五番目が「禅定」です。坐禅です。坐禅しな

くても、心静かにということ。お釈迦さまは沈黙の尊さを説いています。

私たちは日頃心が全く落ち着かない。あっちこっちへ行つて、ざわざわしています。心がざわざわしていると真実が見えません。

法然上人は「人の心は猿猴（えんこう）の枝を伝うがごとく定まり難し」と言っています。

「猿猴」とは猿のことで、人の心はあっち行き、こっち行きして全然静まることはない。皆さんも私の話を聞きながら心があっちに飛び、こっちに飛びしてますよね。本当に心は定まり難い。でも私は皆さんが話を聞いてくれると思うから真剣に話をさせていただいているわけで、誤解している方が幸せです。

このように心は定まりがたい。でも時には静かな心で自分の心を見つめ、神様仏様と向き合うことが必要ですよ、ということ。

もう一つは「智慧」です。これは知識とは違います。知ることには日が当たって、血となり肉となり、自分の身に付いたものが「智慧」です。

今の教育は知識教育で、知識ばかりだ。何でも良く知ってるけれども、何の役にも立たない。そんな大学だったら全部つぶしたらいいと思います。智慧を磨かないと駄目です。聞いたことは忘れる、見たことは忘れない。したことは身に付くんです。聞いて知ったことは実行しなければならぬ。「智慧」というのはそういうことです。

日本の政財界も、国会議員も、テレビを見てたつて、それらしい顔をしてる人は誰もいませんよ。次の国会議員選挙があつても、皆さん行かない方がいい。国会議員がいなくても、役人さえいれば国は動いていきます。

今挙げた六つのうちで、私が一番大事だと思



うものは「困った人を助けなさい、優しく手を差し延べなさい」です。皆さんの職場でも地域社会でも思いやりは大事です。

私は横浜善光寺海外留学僧育英会の第二期生として奨学金を頂き、インドに五年間いました。「よっぽど勉強したんだろう」と思われますが、昇る太陽と沈む夕日、月と星を眺めていたら、いつのまにか五年経っていたんです。

カルカッタ大学にいて、三年ほど経って、お金もなくなり、どうしようかと思っていた時に、お釈迦さまが悟りを開かれた十二月八日前後に一週間ぐらいかけて、成道の地のブツタガヤにお参りに行った。草むらに座っていたら、黄色い衣を着た坊さんが前を通った。歩き方や素振りですら日本人だと分かったので、声をかけて話をしていたら、その人は善光寺育英会の一期生で、タイのワットパクナムでの修行を終える前に、お釈迦さまが悟りを開いたインドの聖地を巡礼

してから日本へ帰ろうと思つて来たということでした。

「そんな奨学制度ができたのか」と思いました。どう見ても私より賢そうには見えなかつた。こんな人に奨学金を出すなら、私のもらつた方がいいな、と思つて住所を聞いて、黒田大圓武志和尚に手紙を書いた。すると「理事會に諮りたいから論文を書いて送れ」と返事が来た。書いて送つたら、すぐ返事が来て、「留学僧はタイとアメリカだけで特別に許可する。普通は一年だけど、あなたは無期限で好きなことをやってこい。ついては、いくら欲しい」ということでした。

いくら欲しい？ そりゃ多い方がいいですが、そうは書けないから、遠慮して「月三万円」と書いたら送つてくれました。当時、大学の教授でも月五〜六万の給料だったので、いいお金だつたんです。

一年が過ぎたら、理事會で「あなたの支給額は少なすぎるから五万円にします」と五万円送つて下さつた。見る目のある方は違う。二年目に大圓和尚が私のところに訪ねてきて、いろいろ話をして下さつた。その中で「食べ過ぎて病氣になつてゐるような日本人が、もう一口欲しいな」と思う分を、この留学僧育英會に寄付してほしい。一口は十円だ」と。一日に三十円、一月に九百円、一年に一万円。だから、その一万円を寄付してもらつて、この留学僧育英會に使いたいんだ、とおっしゃつた。

皆さん、一口一万円でもいいので、是非お願いします。留学僧育英會も二十五回目の留学僧を送りました。あと五十年も百年も二百年も、千年も二千年も続いて欲しい。五十万円、百万円なんて長続きしないことはやめて、一口一万円だつたら長続きします。私も恩恵を受けたから、これからさせていただこうと、博志方丈さんに

出させていただきました。

「金は貯めて置いていく。罪は作って持つて行く。教えは聞かずして墜ちていく」。聞かなかったら墜ちていくのは当たり前だけど、聞いても墜ちていきます。

お金はあの世に持つて行けません。お金を貯めるために作った罪は、あの世に持つて行かないかならない。私のようにいいことを言つてくれる坊さんの話を聞いても墜ちていくんだ。何が一番真実かといえば、育英会の一万円の方が生きてきますよ。

カルカッタでマザーテレサさんの教会に行つたら、時々お会いすることがありました。「死を待つ人の家」にも行きました。何日もご飯を食べていない家族に、マザーテレサさんがチャパティー（薄焼きパン）なんかをあげると、そこのお母さんが、いただいたらすぐ裏の家に行って、半分渡して帰つてきたという。それでマ

ザーテレサさんが「あなたの家族だけでもやつと一食あるかないかなのに、半分どこへ持つて行つたの？」と聞くと、「私の家の裏には、もつと貧しい家族がいるんだ。だから半分あげてきた」と言う。

余っているからあげようではなくて、自分の食事を減らしてでも、相手を自分と同じように思う優しさ。これが本当の布施です。

日本の国も世界も乱れています。これからは見えないものに対する畏敬の念、神や仏やご先祖に手を合わせる心が大切と思います。心の時代だから、世界中に一人でも真実のあるお坊さんは残っていたきたい。それを手助けするのは皆さんです。困つたところを助ける、これから生きる人を育てることが大事です。

原子力発電は、百害あつて一利なしです。敦賀の高速増殖炉には「もんじゅ」とか「ふげん」の名前がついている。文殊菩薩、普賢菩薩はお

釈迦さまの脇侍です。原発も最後は仏さまの力を借りないと駄目だと言うことなのか。原発が駄目になったら「おシヤカになった」とでも言い出すのでしょうか。

どんなに偉いお釈迦さまでも、右腕、左腕が大事です。文殊菩薩は智慧を司る。普賢菩薩は慈悲です。阿弥陀さまも両脇に観音菩薩と勢至菩薩がいらつしやる。奈良のお薬師さんには日光菩薩、月光菩薩がいます。考えてみたら、清水の次郎長が偉くなったのは大政、小政がいたからですよ。

横浜善光寺には、大圓武志大和尚の魂と精神をがっちりと受け止めた博志方丈がいるけど、お母さんのみちこ菩薩と、奥さんのまゆみ菩薩がおられるから大丈夫だ。

善光寺育英会で育った百二十人から百三十人いる留学僧たちは、それぞれ国に帰って住職に

なったり、研究所の研究者になったり、大学の先生になったりして活躍している。先代の大圓武志大和尚は「身を削り人に尽くさんすりこぎの、その味知れる人ぞ尊し」と、いつもおっしゃっていました。「悟りは脚下にあり」です。彼の岸に悟りがあつたり、幸せの世界があるわけじゃない。あなたの足元、あなたの心の中にこそ、悟りも彼岸も幸せもあるんです。





善光寺霊園ニユース

横浜やすらぎの郷霊園

◇まあるいこころ やすらぎのこころ

昨年三月、やすらぎの郷霊園に大きなモニユメントが完成致しました。進入路からも大きく見える赤い球体。その下には色とりどりの花々が咲いて、お墓参りにお越しいただく皆さまをお迎えいたします。

これは、その前年に晋山式を行い、法燈を高く上げられた善光寺黒田博志方丈の記念モニユメント。

「師父先代住職のこころをこころとして、精進して参ります」と語る博志方丈。

善光寺開創以来永年の念願であった霊園として誕生した横浜やすらぎの郷霊園。

先代住職は霊園の理念を「こころの拠り所、こころのやすらぎ場所」とし、「ゆりかごからやすらぎの郷まで、この郷が安心・平和・幸福感を抱く素晴らしいところだと言われるように心尽くす」と誓願されました。この「こころ」こそが「赤く燃えるこころ まあるいこころ、やすらぎのこころ」です。



宗派や国籍、年齢にとらわれずにお互いが理解しあい、調和できればきつと平和な世界、地球上全ての国、人々に幸せをもたらすことができるはず。一人ひとりのまあるいところ、ころのやすらぎが世界平和に繋がっている。無縁ではなく有縁の場所、それぞれが様々な縁を感じる事が出来る郷のシンボルを赤い球体で表しました。どうぞみなさまやすらぎにお越し下さい。

「手を合わす やすらぎの郷 風さやか」

（大乘寺山主東隆眞老師

平成十一年のやすらぎの郷開園式にて）

◇「ほとけに親しむ」

やすらぎ寺子屋 開催

昨年四月より霊園管理事務所において月に一度やすらぎ寺子屋を始めました。お釈迦さまや祖師のお言葉に触れる機会を通し、共に学びあい、仏の教えを日常に取り入れて、心やすらかに日々を過ごすことができる、そのきっかけとなればと思います。

約一時間の前半は椅子坐禅。後半は法話。その後、茶話会となります。まだ十数名の小さな会ですが、和やかに開催しています。お気軽にお問合せ下さい。ご参加お待ちしております。



寺子屋参加者ご感想（アンケートより）

○仏教は近くて遠いものを感じます。この会に遠い距離を近づけて頂ける気がします。

（第一回参加者）

○心落ち着く時間をすごさせて頂いています。日常あわただしく過ごしているのでこのような時間は大変貴重だと思っています。

（第二回参加者）

○毎日、バタバタと過ぎ、一度止まって考える事が必要なと思いました。

（第八回参加者）

○坐禅でリラックスすることが出来るようになりました。前日も夜ぐっすり眠れました。法話もわかりやすくしてお経を読むときにさらに心をこめてできそうです。

（第十一回参加者）

☆皆さまご参加ありがとうございます。☆



寺子屋 予定

▽7/7 (土) ▽8/5 (日)

▽9/8 (土) ▽10/14 (日)

▽11/10 (土) ▽12/8 (土)

毎回 午後二時から やすらぎの郷霊園



◇やすらぎ通信

やすらぎの郷霊園では年に四回『やすらぎ通信』を発刊しています。霊園からのお知らせや善光寺の行事紹介などその時々話題を掲載しています。

こころは丸く

智に働けば角がたつ
情に棹させば流される
意地を通せば窮屈だ

(夏目漱石『草枕』より)

昔から、人の世、人間関係は微妙なものですね。古人はこんな言葉で処世術を語りました。「人を大きく上にして、心は丸く 気は長く 腹は立てずに横にして 己は小さく下にあれ

また、

「気は長く 心は丸く 腹立てず

口慎めば 命長かれ」



俺が、私が(俺のおかげで…、私がいるから…)の我(が)が角になると、凸凹して中々丸くはなりません。○(まる)は角のない大きな心、仏さまの慈悲のお心、大きく圓か(まどか)にやわらかな心を表します。

『短気は損気』（たんきはそんき）この言葉はやすらぎの郷にお墓を持たれているある方から教えていただいた言葉です。子供六人を育て上げたお母さんが口癖にしていた言葉との事。どっしりと構えてニコニコ笑顔のお母さん。六人の子育てはさぞ大変であったかと思いますが、この言葉を口にして心を穏やかに保っていたそうです。亡くなられた今もその心は受け継がれて、仲良くお墓参りされる姿が見受けられます。

ちよつとした事で腹を立てずに、この言葉を口にしてこころまるく生きたいなあ。 合掌

（『やすらぎ通信』23号 平成23年秋彼岸号より）

竜（りゅう）をみたことはありませんか？

平成二十三年十一月に国賓として来日されたブータンのワンチュク国王夫妻。十月にご結婚、

その爽やかさが連日報道され話題になっていました。国民の幸福度が高い国として知られるブータン王国。

六日間の滞在期間中には国王の希望で東日本大震災の被災地にも赴かれています。福島県相馬市の小学校を訪れた際に子供たちに向かって問いかけられた言葉が印象的でした。

「君たちは竜を見たことがありますか？」

「私は見たことがあります」

驚く子供たちに向かって国王は言葉が続けます。

「竜は一人ひとりの心の中にいます。私たちは人格という名の竜をもっています。竜は私たちみんなの心の中にいて経験を食べて成長します。年を重ねることによってその竜は大きく、強くなります。そして何よりも大切なことは自分の感情・湧いてくるものをコントロールして生きていくことが大事です。どうか皆さん一人ひとり自分の竜を養い、鍛錬して大きく素晴ら

しく育てていつて欲しい」

ブータンに伝わる竜の話をされる国王の隣で、「この次、日本に来るときもまたこの学校に来ることを約束します」と笑顔で語られた王妃。なんて素敵な笑顔をされている人たちだろうと感じました。

自分の竜を養う。経験することによって生じる感情に左右されない心を養うことが大切。つらく悲しい経験が襲ってきても、それに負けない竜を育んで欲しい。

ブータンでは国民総生産（GNP）ではなく国民総幸福量（GNH: Gross National Happiness）の増加を政策の中心としてゐるそうです。物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさ、国民の幸せを指す。

幸せといわれても漠然として人それぞれで価値観は異なりますが、だれもが幸せになりたいとは思いませんよね。どこで幸せを感じるのか。

どのような時に幸せを感じるのか。幸せってなんだろうと考えさせられました。今年一年皆さまにとつて幸多き年となりますよう、心よりご祈念申し上げます。

合掌

〔やすらぎ通信〕24号 平成24年お正月号より〕

公式ホームページ

横浜やすらぎの郷霊園の公式ホームページが開設されました。

霊園からのお知らせやすらぎ通信など随時更新していきます。是非ご覧頂きご意見などお送り下さい。

URL : <http://www.y-yasuraginosato.jp>

Eメール : info@y-yasuraginosato.jp



一 齊法要のり報告

【平成二十三年】

三月十九日 春彼岸法会

法話 善光寺住職

三月十一日に発生した未曾有の大惨事、東日本大震災、福島第一原子力発電所事故。その後の計画停電などから、一齊法要の中止も検討されましたが、共に祈ることの出来る場、お寺として予定通り開催致しました。

電車の間引き運転やガソリン不足。遠方には出ない、出る気になれないなど自粛ムード広がる中ではありましたが、午前・午後とも二百名を超す方々がお参りにお越しく下さいました。

お彼岸のご供養、ご先祖さまへのご供養の前に東日本大震災で犠牲となった方々のご冥福と

ニユー・ス・アラカルト

被災された方々に一日も早く復興への道筋が見えますように祈り、読経が営まれました。

六月二十四・二十五日 孟蘭盆施食法会

法話 善光寺住職

善光寺住職より 孟蘭盆供養と施食会の由来についてのお話を頂き、二日間わたり大勢の僧侶によるご供養が営まれました。

九月二十一日 秋彼岸法会

法話 善光寺住職

「今年は、自然の恐ろしさをこれでもかと思いは知らされるような一年であったと思います。

（東日本大震災・台風十二号の被害、紀伊半島豪雨災害……）自然に対して人間の小ささ・無力さ。でもだからこそ人間はつながりを求め助け合って生きていける」

そんな一年最後の一齊法要は台風十五号の直

撃の影響を受ける事となりました。夕方に風雨のピークを迎えるとの気象情報により予定を繰り上げて短縮して執り行われました。



【平成二十四年】

一月九日 新年祈禱会

善光寺の事務室長菊地光道師が、先代方丈さまもよくお話し下さった「人間万事塞翁馬」を中心に「ご法話くださりました。

「禍福はあざなえる縄の如し」……福の神と

ニュース・アラカルト

貧乏神は兄弟・姉妹の関係で、切っても切れない間柄です。福も禍も私たちの心の持ちようによって決まるものです。どうぞ皆さまこの一年元気を出して過ごしましょう。と楽しいお諭しを下さいました。



ご祈祷後には東郷敏総代から一言。

徒然草の一節、

「若きにもよらず、強きにもよらず、思ひ懸けぬは死期なり。今日まで遁れ来にけるは、ありがたき不思議なり」(『徒然草』一三七段)

さらに「老いにつけ若きにつけ、思いがけぬは命なりけり。今日までのがれきたるはありがたき不思議なり」と続けられ、ご自身が昨年末突然入院された事を明かされました。

「不測の事態は突然にやってくる。幸いにしてまぬがれ、ここにあることが不思議です。今あらたに四方の諸々に、感謝報恩の誠を捧げ尽し供養したい。平素、口先だけのこの輩、追い詰められて改めて気づいております」と時に笑いも交えながらお話しを頂きました。

続いて福引。今年の特賞は、誰の手に？ 楽しい福引で笑顔の輪が広がりました。

ニユース・アラカルト

二月三日 節分追儺法会

ご法話は、黒田法正師(観音寺住職)に、ご自身の体験談をもとに僧侶として日ごろ感じておられることを中心にお話を頂きました。

「今日お寺の門をくぐり、ここにご参詣の皆様すべてが仏さまですよ」と、優しく声をかけられ「私たちは時計の針。チクタクと動きまわっている、見えない裏では仏さまが良くなるようにネジをまいてくれている。それに気がつく。肩の力が抜けるように生きやすくなります。仏に身を投げ入れることが大事」と。

さらに、「『ありがとう』のひと言は幸せを掴む魔法の言葉。どんだん声にして言いましょう」とご法話下さいました。

ご祈祷の後は恒例の豆まき。今年は、友綱部屋よりお相撲さんをお招きして、魁聖かひせい関ほか三名の力士によるダイナミックな豆まきが行われ

いました。

お戒名は「正法院佛心宏照禪尼」

お葬儀は、常在院第三十八世加藤誠一老師が喪主となり、

秉炬（ひんこ） 師 久永寺 久我博宗老師

奠茶（てんちゃ）師 松福寺 山崎恭伸老師

奠湯（てんとう）師 円成寺 馬地良覚老師

によりまして、執り行われました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

民子おばあちゃんに捧げます

東郷 敏

お報せを頂き、何とも悔いています。祖（住職の祖父母の代）の位置でたったお一人存命であられた尊いご祖母様、おばあちゃん。天寿を全うされたとは申せ、悲しいことです。久しく

ニ ュ ー ス ・ ア ラ カ ル ト

お側に在ったご家族の辛さ淋しさは他人（ひと）にはわかりません。追慕する時、本当に親（ちか）しくして頂いていただだけに残念至極でなりません。

ご生前に今一度お訪ねし、過ぎた日の四方山話（よもやまばなし）に時を過ごせばよかつたと悔いています。ほんとうにお優しいお方でしたから：。

光真寺の嘉おばあちゃん、常在院の民子おばあちゃん。お顔や身体つき、動きまでよく似ておいででした。倫子お母さまは今でも親の子。いくつになっても母は唯一掛け替えの無い大事で尊い存在。再びご拝顔に浴することは叶いません。「生者必滅、会者定離」とはこのことでしょうか。

照雄大和尚、ご祖母と私の出逢いは半世紀にもなります。永平寺の僧堂。過ぎた日が巡り巡って来ます。そこで倫子様が青春時代を過ごし

ておいででした。やがて強引な武志大和尚が割り込んでご結婚、お二人で未知の地に、お二人だけの横浜善光寺を開創。極貧に耐えながら隆盛にマツシングラ。

草創期のころ、境内やあばら屋で黒田家の集団の子たち（お子様方）を追い回したり、遊ばせたり、みんなおばあちゃんの庇護のもとにありました。また、縁側では袈裟や衣の縫いどり、縫い合わせなど寸暇を惜しんでの針仕事。働いて働いて、休むことのないおばあちゃんでした。いまにも其処に在りし日が、彷彿として参ります。経済的にもゆとりなく、むしろ砂を噛むような艱難、ご苦勞の時代であったと思います。だのにいつもニコニコ。陰となりひたすら娘、孫たちのために支えておいででした。

訪問するといつも「トーゴーシェンシェイ！倫子が……、ミチ子が……」と絶叫しておいででした。懐かしいです。おばあちゃんの存在が

ニュー・アラカルト

なければ、倫子様も今日の善光寺も今の博志住職の存在も無かった。善光寺に関わるすべての事象、いのちの根源、ご祖母さまおばあちゃんの御蔭です。

樹木の繁茂も根のお蔭。親の恩の重きこと天の極まりなきが如し。このご恩に報いるには少々の心掛けでは叶いません。遺して頂いた私たち、精一杯の感謝報恩のマコト、尽して尽しても尚足りぬ思いでございます。

民子おばあちゃん長いことお疲れさまでございました。どうぞ今より手と足を存分に伸ばし、ゆっくりゆっくり極楽浄土へとお運び下さい。今はキットみ仏に見守られ救われて照雄大和尚のもとに召されて逝かれることと思えます。

この天寿もご生前、耐えて忍んで尽されたあなたへの、み仏さまよりのご褒美。ただ唯、安らかに合掌です。

善光寺 掲示板

大駐車場の前にある掲示板。毎月、山内行事の予定や禅語などの紹介を掲示しています。

恒例の坐禅会や写経会、書道教室のご案内に加え、ちよつと目を引く言葉に日野公園墓地にお墓参りに見えた方々も足を止めて見ていかれます。



— ニュース・アラカルト —

端心正念

端心正念とは、「かたよらない心を正しく保つて、心に諸悪を起さないこと」です。
お釈迦様は、好みを貴人に結び、親厚謙遜することを得ざれ。端心正念にして度を求むべし。
（偉い人や身分の高い人と親しくし、それを誇り自慢してはいけません。かたよらない心を正しく保ち持つて、悟りを求めなさい）とおっしゃいました。

「端心」は「端座」より生まれま
す。「姿勢を正しくし、呼吸を整え、心を正し調える」正しい姿勢から、正しい心が生れ、きちんと座れば心もきちんとなるものです。
お釈迦様は「親厚謙遜」の心を戒め、そうゆう心を全て捨て去って、「端心」になりなさいと教えて下さいました。

合掌

和敬清寂

「和」とはなごみ合う心
「敬」とはうやまう心
「清」とはきよらかな心
「寂」とは動じない心



坐禅会・写経会のお知らせ

坐禅会

善光寺では毎月第一日曜日の早朝六時からと、第四日曜日午後三時から坐禅会を行っております。

早朝坐禅の後は、朝のお勤めをし、その後、禅寺の作法に従って、お粥を召し上がっていただきます。

午後の坐禅会は、坐禅を二炷。そして、正法眼蔵随聞記を皆で読み、高祖様の教えに親しんでおります。

これまでに坐禅の経験のない方、初心者の方

のご参加もお待ちしております。お気軽にご参加ください。



平成24年 善光寺坐禅会 年間予定表

■早朝坐禅会 毎月第1日曜日午前6時から

1月は、お休みです。	7月1日（ 〃 ）	午前 5:45 集合 6:00～ 坐禅・読経 7:30～ 朝食(お粥) 8:00～ 解散
2月5日（日曜日）	8月5日（ 〃 ）	
3月4日（ 〃 ）	9月2日（ 〃 ）	
4月1日（ 〃 ）	10月7日（ 〃 ）	
5月6日（ 〃 ）	11月4日（ 〃 ）	
6月3日（ 〃 ）	12月2日（ 〃 ）	

■日曜坐禅会 毎月第4日曜日 午後3時から

1月22日（日曜日）	7月22日（ 〃 ）	午後 3:00～ 体操(体ほぐし) 3:20～ 坐禅 4:00～ 経行 4:10～ 坐禅 5:00 閉会
2月26日（ 〃 ）	8月26日（ 〃 ）	
3月25日（ 〃 ）	9月23日（ 〃 ）	
4月22日（ 〃 ）	10月28日（ 〃 ）	
5月27日（ 〃 ）	11月25日（ 〃 ）	
6月24日（ 〃 ）	12月23日（ 〃 ）	

場所：善光寺 釈迦殿

費用：無料

服装：ゆったりとしたもの。靴下は履きません。時計やアクセサリーは、はずしてください。

※参禅ご希望の方は、前日午後7時までにご連絡下さい。

写経会

お写経は、自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の追善、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。

善光寺では月一回、左記にて「写経会」を開催中です。

どうぞご参加ください。

【日時】 毎月第四金曜日

(十一月・十二月は休み)

午後二時より一時間半

【場所】 善光寺不動殿

【読経】 「般若心経」を全員で看読

【写経】 引き続きお写経「般若心経」

【費用】 無料

平成24年

善光寺写経会年間予定表

1月27日(金)	7月27日(金)
2月24日(〃)	8月24日(〃)
3月23日(〃)	9月28日(〃)
4月27日(〃)	10月26日(〃)
5月25日(〃)	11月は、お休み
6月22日(〃)	12月は、お休み
午後	
2:00～	読経「般若心経」
2:10～	写経
3:10～	読経
3:30～	解散

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙なども一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

※参加の方は準備の都合上、前日迄にご連絡下さい。

坐禅会・写経会ともに連絡・

善光寺 横浜市港南区日野中央一十二一九

(〒二三四〇〇五三)

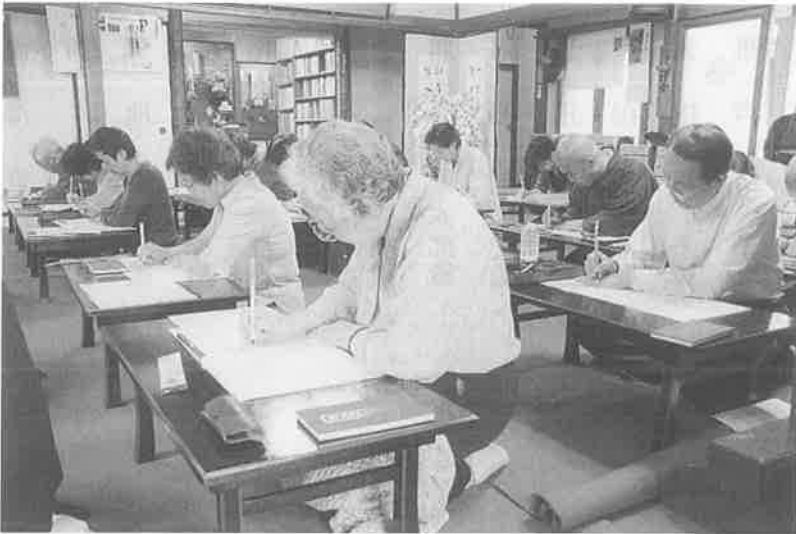
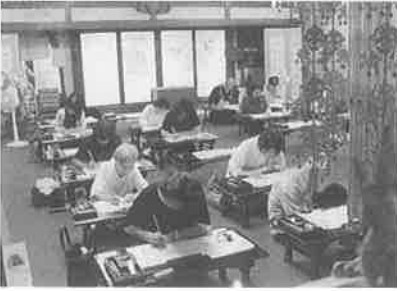
電話・〇四五―八四五―一三七一

・FAX・〇四五―八四六―二〇〇〇

Eメール : info@zenkouji.net

URL : <http://zenkouji.net>

※参加の方は準備の都合上、前日迄にご連絡下さい。



育英会寄付者

■平成二十三年度

石川県	大乗寺	東隆眞殿	世田谷区	富田	繁殿
長野県	正眼院	内山款偉殿	港南区	増山	静江殿
京都市	多福	院殿	芦屋市	東郷	公殿
金沢区	太寧	寺殿	新宿区	東亜建設工業殿	
茨木市	安井	隆同殿	港南区	熊谷	豊太郎殿
神奈川区	滝沢	孝子殿	都筑区	阿部	匡宏殿
江東区	西谷	恒殿	川崎市	宮田	富夫殿
港南区	桂川	正克殿	金沢区	下田	恒治殿
大田原市	佐貫	八重子殿	磯子区	太田	和子殿
港南区	池田	耕三殿	都筑区	唐戸	清子殿
南区	大森	キク工殿	豊島区	新井	正枝殿
			港北区	瀧澤	武雄殿
			港南区	南有	里殿
			岩手県	菊池	カツ殿

船橋市	都筑区	磯子区	戸塚区	磯子区	戸塚区	旭区	港南区	柏市	台東区	港南区	町田市
村田一夫殿	豊島節夫殿	小沢正気殿	富士佳代子殿	増田京子殿	荻野幸子殿	河村久子殿	千葉佳子殿	伏見邦弘殿	山口翠雲堂	山泉篤殿	鈴木幸雄殿
									(株)	(株)	
										せんざん	

千葉県 岩井文子殿
 港南区 原 功殿

ありがとうございます寄付を賜り、
 誠にありがとうございました。



〔目的〕

仏教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1. Zen Center of Los Angeles (LA 禅センター)
"923 S.Normandy Ave., LA., CA90006U.S.A"
2. Zen Mountain Center of NewYork (NY 禅センター)
"Box197,Mt.Tramper,NY12547U.S.A"
3. Zen-Zentrum Eisenbuch (アイゼンバッハ・禅センター)
"Eisenbuch 7 D-84567Erlbach Deutschland Germany"
4. WatPaknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand"
5. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成25年4月より1年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する
必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1. 論文（次項による）
○論題
①これからの国際興隆と仏教の役割
②世界平和と仏教徒の誓願
③留学僧として私はこれを学びたい
④異文化の中で仏教を学ぶ
いずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿
用紙5枚以上（A4判タテ書き）
2. 保証人と連署した願書
3. 卒業証明書
4. 履歴書
5. 推薦書
6. 健康診断書

〔募集人数〕

平成25年度若干名

平成24年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成25年1月12日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒234-0053 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第 26 回 生

横浜善光寺 留学僧募集

平成25年度・2013

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

育英生からのお便り

日本で一番感じられた文化と

善光寺との出会い

アイーダ・ママードウア

(第二十二回育英生)

私はアゼルバイジャン人のイスラム教徒で二〇〇九年四月より国立金沢大学院医学系の博士課程に入学しているアイーダ・ママードウアです。私はアゼルバイジャンの首都バクーに住み、バクー国立大学の生化学部からその大学院修士課程を修了し、修士のときイギリスに二年間留学しました。

私は、子供のころからイスラム教徒の教育を

受け育てられた子でした。学校以外に、自分一人で行けるところは家の近くにある古い図書館だけでした。図書館で働いているお婆ちゃんは私のことが大好きで、いつも一番いい本を薦めてくれました。しかし、ある日、そのお婆ちゃんには私に仏陀の本を貸して、これは内緒で、この本を誰にも見せないでと約束しました。その本を読んだ後、仏陀への興味と感心はずっと続きました。そこから、さらに仏教への興味と感心がつながっていきました。

図書館で仏教に関する本ばかり読み始めて、日本の文化の背景である日本仏教にも興味深くなりました。しかし、日本の文化を本から読んでも、分からなかった。仏教を知的に理解できない。いくら本を読んでも分からなかった。大きな壁にぶつかったような感じでした。その壁を乗り越えるために、仏教を体を通して、体験的に学習したいと思うようになりました。そ

のために、どんな難しくても、実際に日本へ行って、日本の文化や日本の仏教を体で体験することを強く決意しました。

修士課程を修了したあと、両親の猛烈な反対を押し切って日本へやって来ました。日本へやって来た私は、福井県の永平寺、神奈川県、石川県の總持寺をはじめ、多くの寺院を歴訪しました。そして、これらの寺院を歴訪するうちに、寺院に止宿して、仏教を学習しようという思いがだんだんと募ってまいりました。けれども、この希望は、そう簡単にはかなえられそうにはありませんでした。

私の願いを受け入れてくれたお寺は、石川県金沢市の大乘寺だけでした。大乘寺の東隆眞ご住職様です。東ご住職様は私がイスラム教徒であることを前提として、あなたが希望するならばあなたの仏教への興味と関心を体験的に学習することを、この大乘寺で許可するとおっしゃ

っていたきました。そこで二〇〇七年四月より、私は大乘寺に入り、毎朝午前四時三〇分から坐禅、朝のおつとめ、作務など、ほとんど大乘寺の雲水と同じ生活を学習していました。ある朝、大乘寺できれいな尺八の音が聞こえました。お寺の静かな景色の中で、尺八の音は心を鎮めるように響いていました。私はあの音にびっくりし、尺八の練習をやり始めました。今でも、毎日学校へ尺八をふきながら通っています。

私は大乘寺で生活し、仏教、禅などは神経障害や精神的に崩れた人たちにも、きわめて有効な力を発揮するのではないかと思うようになりました。それで、金沢大学の神経科学や意識の専門分野へ入学しました。しかし、勉強を続けるために経済的に非常に困難な状態でありました。大学で勉強しながらできるだけアルバイトに時間を費やしたくないと考えておりました。ある日、大乘寺で横浜善光寺のご住職様黒田老





懐かしい方々の写真が一杯

龍泉院 椎名 宏雄老師
千葉県

『成寿』第四十一号のご恵

与に感謝無極。晋山結制のご盛筵、心よりご慶賀申し上げます。特に豊富で美しき口絵は拝見するに懐かしく、篁師は院生時代の友人、光真寺様は同安居、大乘寺様は大卒当時からのご知己交友、そして故武志方丈様は泉岳寺様を通じての交誼でありました。そのまた御師父の白純老師は不肖の実父とは宗議の仲間同志。俊雄方丈が若き日に侍者とし

て師父様と共に拙寺に來山されたこともありませぬ。皆宗門の至宝。そして現董が立派に故方丈の衣鉢を相続。これに勝る至宝はありません。益々のご活躍を祈り上げませぬ。

育英会に南米の方からも

南アメリカ
曹洞宗両大本山別院 仏心寺
采川道昭老師

『成寿』拝受致しました。

晋山結制の盛栄洵にお目出度く、心よりお祝い申し上げます。

常々大変お世話になっておりますが、このところ多忙を理由に御無沙汰致しており、

誠に申し訳ございませぬ。

貴寺留学僧育英会の方にも御縁がありましたら南米の方からも応募させて頂き度く存知しております。その折はまた更に御法愛賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、尊大宗師益々御法身堅固にて寺門の更なる御繁栄を祈念申し上げます。御礼申し上げます。

御母堂様に何卒よろしく御風声下さいませ。



宮崎行学育英生奨学金を

ドイツ
ドイツ普門寺住職
中川正壽老師

皆様ご清祥にお過ごしのことと存じます。

さてこのたび普門寺ご開山、本山七十八世宮崎奕保禪師がご遺言としてこのドイツ普門寺に三度目として多額のご寄付を下さいました。以降どのような形で使わせていただくべきかを考えて参りました。結論は御遺意の全額をこの普門寺において『宮崎行学育英生奨学金』の基金とさせていただきますことになりました。

た。

昨春にあってはまだ予定の段階でありました冬四月の集中修行（私どもはクラウズールと名付けておりますが、坐禅中心の冬安居であります）をただいま勤めております。

私どもスタッフ三人のほかに四ヶ月修行するのはスイス人女性一人、一月、二月と二ヶ月参加するものはさらに男性二人、女性一人であります。昨年臘八撰心、年末六日間の歳代わりレトリート、そしてサンガ中心メンバの撰心の参加がありました。そして二月には三週間の涅槃会撰心

をいたします。奨学金は、これらを参加して安居を修行する四ヶ月また二ヶ月参加者で三十五歳以下の者を対象にいたします。いまのところ全費用の半額、例外として全額の支給としております。

昨年十一月より普門寺の実情にあつた四ヶ月安居をスタートいたしましたして、力強い手応えを感じております。これをもつて、随喜の参禅者はたとえ一人二人であらうとも、ドイツ普門寺はより一層ヨーロッパの地に根付いた道場になりました。大悲山経営の実情は、コースの参加者はそれ程増えず、このたび四ヶ月に

わたる安居を実施いたしましたので、この面さらに収入が減りますが、幸いいろいろなタイプの寄付の合計が年間数百万円になりますので、赤字すれすれのところで均衡しております。これらの寄付は私どもの活動への支援であり毎年少しずつ増えておりますので、門戸を開きつつもより一層坐禅弁道に勤めたく存じます。

日頃明るいニュースの少ない昨今ですが、ヨーロッパ・ドイツの片田舎より一筆啓上申し上げます。

どうぞご健勝の上さらなるご活躍を祈念申し上げます。

御高德を継承され御精進を

天嶽院住職 嶋崎興道老師

藤沢市

萬山緑翠の好季節益々接化無辺の趣き大慶至極に存じ上げます。

『成寿』第四十一巻有難く拝受致しました。篤くお礼申し上げます。

此度晋山式を挙行された由心よりお祝い申し上げます。先代様の御高德を継承され御精進の御様子何よりも法悦至極に存じ上げます。

先代様、黙仙寺様共々尚春秋にとむ惜しい方が化を他界

れ、善光寺を前途洋々望むことができません。

どうぞ皆さま神戸にいらして下さい。ナリスの成寿殿には開基村岡満義、黒田大圓武志大和尚が祀られており、全国、海外からもお参りが絶えることがありません。ご案内します。

私も八十路の道程です。外出も容易ではありませんが、ゆっくり『成寿』を拝読して心安らかにしております。

皆さまお元気で達者にお過ごし下さい。有難う御座居ました。

純粹さと親しみ易さ

黛 亨様

いつも『成寿』ありがとうございます。毎回、個人的な表紙の絵、きれいなカラー写真をふんだんに取り入れ、紙質も良く、力を入れた編集となっております。感心させられます。

黒田武志方丈ご逝去されて、はや七年になりますね。早いものです。最初にお会いした時の方丈の童顔や親しみやすい人格が今でも鮮やかに浮かんできます。

宗教家として名の通った人は、どんな地位や名誉ある立場にあっても、押しなべて、子供らしい純粹さと親しみやすい庶民的性格をもっておられるようです。上がれば上がるほど、下がってくる、そういう方丈の人格が、私には、魅力でした。宗教の枠を超えたものを感じたのです。

方丈は、またいつも釈尊という原点に立ち返って、明恵上人のように釈尊を慕い、仏教の再興を願った、情熱溢れる宗教心の持ち主でもありました。そして「仏教は人にある」と見て、育英会を立ち上げられたのは正眼でした。方

さんをはじめ、皆様によりしくお伝えください。

大圓武志大和尚様が

バックで

平塚市
アンティーク青年会会長
山口義男様

なかなか温かくなりませぬね。此度は想い出となる「授衣式」に参列させて頂き又お写真をお送り下さり有難うございました。心より感謝とお礼を申し上げます。

親切丁寧な筆使いご性格そのままですね。ご挨拶の時は大圓武志大和尚様がバックで…私を含めほとんどの方が

思われた事と思いますが、私のはあのお言葉が「卒業論文」で新しい三世のご誕生と思っ
ています。新しい善光寺さん
を期待しています。この目で見れる事を楽しみにしています。
す。

もう少しで温かい春がやって
くると思いますどうぞお揃い
でお体ご自愛ください。いつも
やさしく親切にして下さる
倫子様にも宜しくお伝え
下さい。

横浜市
東野光生様

【平成二十三年六月】

梅雨にさしかかる鬱陶しい日々、相変わらず御精励の毎日をお過ごしのことと拝察致します。

過般は御多忙の中賞状をお送り下さり洵に有難うございました。

お陰様で展覧会も恙無く終了し、震災後の時節にも拘わらず、来場者の数も殊の外多かつたことは幸いでした。

また頂戴した賞状は、月末に開かれた九段のアルカディ

益々励まされた気持ちで

埼玉県行田市
小野義彦様

さて、過日は、突然の来寺にもかかわらず、心温まる厚いおもてなしを賜りまして、深く感謝申し上げます。

博志老師、大奥様、そして若奥様の、それぞれ慈愛あふれる笑顔と御言葉をいただき、益々励まされた気持ちでおります。

なき方丈様との御因縁は、一言では申せませんが、今になっても、叱られているよう

な気持ちになることも、思わず笑いがこみ上げるようなこととあります。かつてロスアンジェルスにて元気な方丈様と共に、飲んだり食べたり、沢山の御土産を頂いたり、車で色々な所をご案内申し上げたり、観光でご一緒した時のことなどが、きのうの事のよう、思い出されます。

前角老師や桐ヶ谷寺様のご縁も含めて、本当に有難いことと感謝申し上げます。

愚僧は近く、渡り鳥よろしく、少し暖かい国々に越冬を兼ね修行にまいります。皆様の

御法愛を励みに、精進に励む志を新たに致しております。

それでは、博志老師、大奥さま、若奥様はじめ善光寺山内の皆様様に於かれましては、どうぞご健勝にて、益々のご多幸とご発展を心より祈念申し上げます。合掌





*The story of Girellans
9th century*



読者のたより

もはや九十 感謝の便を

東京都

天光院前住職 兼

京都清浄華院院主

真野龍海様

いつも御本ありがとうございます。

小生四十年位前、スイスを単独ドライブした節、とある都市に泊まり、当地大学を訪問。ふと図書館に入り、我が著書『現観莊嚴論の研究』を探した所、書架に保存されていました。多分、貴寺先師の御芳志で、当大学に寄贈されたものと思いました。小生、もはや九十になんなんとし、この事を申す機会もこれ

が最後と思いつつ、感謝の便を申し上げます。

合掌

ゆっくりと拝読致します

京都市

清水寺成就院

大西真興様

梅雨の候、皆様お健やかに
お過ごしのこととお慶び申し上げます。

この度は『成寿』ご惠贈賜り有り難うございます。ゆっくりと拝読させて頂きます。

お時候柄、皆様のご健勝祈念申し上げます。
合掌

三世ご住職のご晋山

おめでとうございます

長岡京市

西山浄土宗総本山

光明寺様

この度は『成寿』四十一巻
ありがとうございます。御礼
申し上げます。

三世ご住職のご晋山、誠に
おめでとうございます。益々
のご隆盛念じあげます。

合掌

ご意志が脈々と

東京都

衆議院議員

田中慶秋先生

月日が経つのは早いもの

で、この度七回忌をお迎えす
ると伺い悲しみを新たにしてい
ております。大圓武志大和尚に
は生前大変お世話になりました
た。心より御礼申し上げます。

とりわけ留学生のためにご
尽力されましたことは日本に
とつても世界にとりましても
有益なことであり今もご意志
が脈々と受け継がれているこ
とを大変嬉しく思っております。
私も世の中の一助となる
べく努力を重ねて参ります。



出藍の誉れ

福井県

興禅寺住職

木崎浩哉老師

御貴山益々ご隆昌の程慶賀
申し上げます。

ただいま、『成寿』第四十
一卷誠にありがとうございます。
厚く御礼申し上げます。
大圓武志大和尚様の偉大なご
遺徳を心から追慕致します。

又、新命博志和尚様の御晋
山、まことに目出度く心から
お慶び申し上げます。「出藍
の誉れ」どうぞこれからさき
立派なお師匠様を越えてご活
躍下さいますことを御祈念申

上げます。

合掌

晋山結制 御祝い

廣澤寺住職
小笠原隆元老師
長野県

時下日々に初夏の風光の下、本日は『成寿』第四十一巻を拝受、御礼申し上げます。晋山結制の円成も御祝い申し上げます。

法身堅固 福聚無量を祈念

川越市
蓮光寺住職
今泉源由老師

深緑がさわやかな昨今です。『成寿』第四十一巻春季

号を拝受しました。いつもありがとうございます。晋山結制まことにおめでたく存じます。益々山門の隆昌とご法身堅固福聚無量を祈念いたしております。

弁道精進を

横浜市
駒澤大学名誉教授
佐々木宏幹先生

お忙しい日々をお過ごしのことと存じます。先日は『成寿』第四十一巻、貴師の晋山結制と先代大和尚様七回忌の特集号誠に有り難う存じました。実に内容の充実した雑誌が出来上がり、手にする人を

得心させるものと思います。

貴師の文にもありましたように、益々弁道精進に励まれ、宗門いや広く仏教界のために活躍されるよう念じております。奥様、母上様によろしくお伝え下さい。まずは以下御礼まで申し上げます。

厳肅な気分が

東京都
弁護士 雨宮眞也先生

この度は、晋山結制まことにおめでとうございます。これを機に、ますますご発展、ご活躍なされますよう心から期待し、お慶び申し上げます。

また、『成寿』四十一巻あたりがとうございました。式典、法要を目の当たりにするような厳肅な気分が致しました。

駒澤大学時代に大変にお世話になりました。佐々木宏幹先生の法話も懐かしく楽しく読ませて頂きました。ありがとうございます。

留学僧も元気に勉強

長野県伊那市
常圓寺住職
角田泰隆老師

『成寿』第四十一巻をありがとうございます。この度の採用育英生のウカシユ・法純さんはこの四月より駒澤大

学大学院で熱心に道元禪師の教えを学ばれています。善光寺育英会があるおかげで、ウカシユ・法純さんのような海外からの留学僧が仏教や曹洞宗の教えを学べることは有り難いことであり、善光寺様のすばらしい活動に敬意を表します。

若きリーダー 活躍を期待

行田市
長光寺住職
福島伸悦老師

善光寺様の季刊誌『成寿』ありがとうございます。晋山結制おめでとうございました。遅ればせながらお祝い申

し上げます。

先代様のご遺志を継がれ、ご精進されているご様子が伝わってまいります。若きリーダーとして益々ご活躍されますことを祈念申し上げます。取り急ぎ御礼まで。

合掌

先代様のお顔が笑んで

秋田県
松庵寺住職
渡邊紫山老師

『成寿』ありがとうございます。晋山結制無事円成、心よりお祝い申し上げます。先代様のお顔が笑んでいらつしゃいます。

博志堂頭さまの「お不動さま」のお話、拙寺にも、男鹿の小浜から現れた「石のお不動」があります。お互い不動心を養いましょう。そして、

院代の前平師、素子さんのどんな様ですか。我が故郷の善光寺の因縁話、すばらしい展開、ご縁に胸が熱くなりました。

お二人の力強い絆を中心に、更なる寺檀和合のご発展を祈念申し上げます。

節分法話を興味深く

船橋市
村田一夫様

『成寿』第四十一巻、平成二十二年晋山式特集号恐縮至極に存じます。有り難く拝受賜り、衷心より深謝申し上げます。

前平武男老師の節分法話興味深く拝読させていただきました。懐かしく思いました。

山門繁栄、興隆を祈念

横浜市
山田和雄様

今回『成寿』第四十一巻誠にありがとうございます。

大圓武志大和尚の七回忌法要を迎えて歳月の経過するの
が早いことに驚いておりま
す。博志住職が先代の遺志を
拝し、山門繁栄、興隆を心か
らお祈り申し上げます。

懐かしさと感謝の気持ち

千葉市
藤田正子様

いつもながらの暖かく美しい『成寿』の御本第四十一巻が届きました。いつもいつも、この本が届くと私は少女のように胸をときめかしつつ表紙

の絵を見、そして中を開きます。今回は第一頁に私の絵の師であった亡き伊藤三喜庵先生の、なつかしく、又美しい作品のカット絵があり、私の心は感動と懐かしさと感謝の気持ちで一杯になります。

今回は、幾度となく貴寺にうかがった折に楽しく、貴重なお時間をいただいた亡き黒田先生の七回忌になられた事のお写真、そして今まだまだお元気で変わりなく写真にある奥様に心よりうれしく、更に善光寺様の御成功を心より祈る気持ちで一杯になりました。ありがとうございますました。

興隆の様を嬉しく

小平市
奥村公規様

『成寿』第四十一巻御惠贈
ありがとうございます。

博志住職の晋山式、大圓方丈の七回忌法要の様子など拝見し、善光寺の興隆の様、嬉しく存じます。益々の御発展心よりお祈り申し上げます。

「三つの理念」に基づき隆昌

藤沢市
島田嘉則様

梅雨に入りました。あじさ

いが今咲かんと準備しています。

『成寿』第四十一巻ありがとうございます。黒田博志ご住職様の巻頭言を拝読しますと将来に向かつてのご決意が伝わってきます。ご尊父様が掲げられた「三つの理念」に基づき貴寺院が益々隆昌されますように祈念申し上げます。

どうぞ皆様良きご活躍を

沖繩県
国吉司凧子様

『成寿』第四十一巻ありがとうございます。なつかし

く拝読しております。先代御師様七回忌終わったんですね。何一つ御供養も出来ず恥ずかしい次第です。

二十二年十月の台風十七号で風の中、花鉢を守るつもりが転倒し、それ以来体が動かず療養しております。何ともふがない話です。原爆症で逝った夫の二十一回忌を出来ずじまいでした。息子は歳が歳だから今年一杯ゆつくりしなさいと言っています。貧乏性の戦前派、早くよくなりたいです。どうぞ皆様良きご活躍をお祈りしております。

どうぞお元気でご活躍を

船橋市
久保田展弘様

この度は横浜善光寺へのご晋山おめでとございます。また善光寺季刊誌『成寿』第四十一巻まことにありがとうございます。どうぞお元気でご活躍いただきますよう、お祈り申し上げます。

心に少しだけ落ち着き

横浜市
豊島 節夫様

『成寿』春季号を誠にあり

がとうございます。

晋山式、節分祭等がアツという間に過ぎたことを、今思ひ出している所です。

三月十一日の震災から毎日慌ただしい日が続いてようやく少し落ち着いた時に『成寿』を手にして、心に少しだけ落ち着きが増した様です。『成寿』が今後も益々充実されることを心から祈念いたしています。

〈追伸〉小生の実家が宮城県東松島市で甚大な被害で、小生も現地にも都合五回程入りました。

すばらしい式典の数々

東京都
大濱 正様

深緑の輝く季節となりました。大変ごぶさたして居ります。この度『成寿』第四十一巻を拝受拝読させて頂いています。有り難うございます。善光寺様には益々山門ご繁栄およろこび申し上げます。

大圓大和尚さま七回忌ご法要、新ご住職ご披露のすばらしい式典の数々、感激していただきます。檀信徒皆様のおよろこびの顔々。御住職様、ご家族皆々様方のご健康とご活躍を

心からお祈り申し上げます。



編集後記

▼『成寿』四十二号お届け申し上げます。

三・一一東日本大震災よりこの一年、各地で天災、自然の恐怖が続きました。あらためて予期せぬ事態の恐ろしさを痛感、未来も刻々無常。

▼『何をなすべきか』共に祈り、共に生きる。例年同様に行われた山内の各行事。その都度、参詣の方々と共に被災地への祈りを捧げて参りました。一人ひとりの小さな祈りが大きな『力』にまとまり、大きな祈りとして届きます様、願って止みません。

▼住職の年間行事での各法話。恥の上塗り、泥吐く思いを致しました。心でわかっていてもそれを表現できないもどかしい気持ち。わかろうとしてわかり得ざるときのいきどおる気持ち。足りないことの学習と行のレベル・アップの必要を痛感した一年。勉強しますと反省しきり。

▼昨年十一月には、法類にあたる群

馬県桐生市の大雄院様の晋山結制に随喜。立派な伽藍に圧倒。大雄院の皆様はじめ、併設の幼稚園のスタッフの方々のお心遣いに感動。今夏的光真寺参拝旅行で大雄院様に参詣致します。皆様のご参加、お待ちしております。

▼今年の節分豆撒きには、友綱部屋の魁聖関はじめお相撲さんが参加。中には体重二百kgを超える巨漢力士も。間近に見る迫力に圧倒されながらも『大きな力』を頂いた豆撒きでした。ご縁を結んで頂いた鳥居総代、大きな舞台を作って下さった(株)板橋様、多くの方のお陰です。ありがとうございます。

▼この夏場所歴代最高齢の奇跡的初優勝の旭天鵬関は、友綱部屋。魁聖関も堂々の勝ち越し。善光寺での豆まきが効果てきめんヨカッタ。おめでとございます！

▼横浜善光寺留学僧育英会も報恩感謝の行です。今年も皆さまの浄財により社会に貢献できる人づくり。未来を担う人材育成の育英会も二十五回を数えました。

▼『心は見える』。思いを形に、心を形にして尽して参りましょう。人は一人では生きていけない。仁と慈悲の心得。魔法の言葉『ありがとう』。『ありがとう』三昧で。

▼書道教室や坐禅会・写経会への参加が急増しています。ありがたいことです。道元禅師様は『霧の中を歩けば、知らず衣湿る』とおっしゃいました。

『お寺にお越し頂ければ、知らず識らず心やすらぐ』『来者如帰』来る者、帰るが如く。そんなお寺を目指して住職はじめ山内一同精進・精進。いつでもどうぞお気軽にご参詣下さい。み仏さまがお待ちしております。

成寿 第四十二巻

平成二十四年六月一日発刊

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目

十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 (株)中外日報社





横濱善光寺